
Dear **狂愛**

みの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Dear 狂愛

【Nコード】

N6072Q

【作者名】

みの

【あらすじ】

フルコンプリートした乙女ゲームの世界に、トリップした女は、乙女ゲームが大好きな29歳。気付くと美少女高校生になっていた。トワがトリップしたゲームは、“狂愛されたい”というテーマで制作され、話を進めて行くうちに攻略対象キャラクターが、高確率で病んでいく。各キャラクターのトルウエンド以外は、主人公が死亡するという問題作なゲーム。そんな世界で、トワが生き残ろうと頑張っている話です。 バッドエンド表現有です、最後はハッピーエンドかも？

プロローグ（前書き）

始めは微妙な恋愛ですが、後半は濃い恋愛でドロドロになる予定です。物語の途中で主人公は時々、死にかけます。コメディ色も入ってます。それが嫌な方は、ご注意ください。

プロローグ

「今度は絶対、間違えない！」

男の声が、白い空間に響き渡る。

「お前を、守りきってみせるから」

その声は、決意と後悔に満ちていた。

「戻ってきてくれ……」

突然現れた0と1の数字が、羅列して男を包み、侵食していった。

男の身体が透けていく。男は目の前の少女に、必死に手を伸ばすが届かない。

「愛している……世界の誰より」

男が消えた空間に、1人の少女が立っている。

「誰か、彼を愛して」

祈るように紡がれた彼女の言葉は、誰の耳にも届くことなく、消えていった。

プロローグ（後書き）

小説初心者です。よろしくお願いします。

1話 トリップ！初めましてツンデレ弟君？

「ここはどこなのよ」

目を開けると、見知らぬ住宅街が広がっていた。

さっきまで私は、ごろ寝してスナック菓子を食べながら、家でゲームしてたよね？ 夢にしてはリアルすぎる。誘拐だったら、こんな路上に放置とかしないだろうし。残るは、私は、実は夢遊病でこの場所に、一人で来たとかしか思えない。

「あはは、ありえないい！」

叫んだ私に、近所の住人であろう、おばさま達がヒソヒソと話しているのが見える。確かに状況を知ろうと周囲を見回す、私は、拳動がおかしい不審者にしか見えないだろうが……そんな、そんな、痛い子を見る目で観察しないで！

流石にこの場所にいるのも気まずいから、移動する。まあ、ここがどこかはわかんないけどね —— でもなんか、見覚えあるよ
うな？

歩きながら、頭の中を整理する。自分の名前は、佐藤^{サトウ} 永久^{トウ}で、乙女ゲームが大好きな29歳。普通に働いて、普通に生きてる一人暮らしで独身女性。

ドクシンとでもヒトリミとでも呼ぶがいいわ！普通に生きて、必死にゲームしてきた結果だ。やってきた乙女ゲームは星の数程ある。初恋の相手もゲームのキャラクターだった。家に帰ればダーリン（

ゲームのキャラ）達がいてくれる。

寂しくなんてない！……コンビニ弁当を買ったの帰宅途中以外は。

気がつけば神社の境内にいた。横には、神主が住んでいそうな家らしきものがある。もう一度言う、家らしきものである。良く言えば、伝統の日本家屋。悪く言えば、ボロい木造平屋、確実にデるだろう。黒い服のG様ではない、白い服のUO様が！

それにしても、良い匂い。もう夕飯の時間。私が最後に食べたのって、スナック菓子だけだ。このままじゃ、飢え死にする！ヤバイよ、私！

お腹の虫が鳴く音で我に返る。

「……お、落ち着ける場所を探していたんであって、断じて、家庭の、手作りカレーの匂いにつられたわけじゃないからね！」

「手前、人の家の前で何を騒いでんだ！ 近所迷惑を考えろ！ 殴り殺されてーのか！」

「うわあ、ご、ごめんなさい！」

「あ、姉貴かよ？ 怒鳴って悪かった」

え？と首を傾げつつ出てきた銀髪不良美少年を観察する。私には姉がいるが、弟はいたことはない。生き別れの弟なんて絶対にいない。でも、知っている気がする。

つり目＋銀髪＋美少年＋不良＋弟＝ツンデレ弟

ツンデレ弟？ボロ神社に住んでいるツンデレ弟だと！知っているよ！多分、合っているはず、自信ないけど。私は、銀髪不良美少年を見て、遠慮がちに声を出す。

「綾君？」

「ん？ 姉貴、腹減ってんだろ。姉貴は昔から腹減ると、ポケットしてるからな。飯できてるから、さっさと入れ」

目の前には現実にはいない人がいる。

呆然としている私を、トロいとか何とか言いながら、ボロい家の中に引つ張っていくツンデレ弟。

ツンデレ弟、綾君はDearという乙女ゲームに出てくるキャラクターだ。

苗字は忘れたけど、日本人の母と、イギリス人の父とのハーフで、銀髪と蒼眼の美少年。中学三年で姉大好きな超シスコン。姉に男を近付けないために不良になった。家事と料理が趣味。姉には不良であることを隠しているらしい。

古い畳が引いてある居間に連行され、ちゃぶ台の前に座らせられる。

ぐうー……と私のお腹が鳴る。

カレーライスを持ってきた綾君と目が合う。

み、みてんじゃないわよ！ 恥ずかしい……

綾君は、顔を下に向けた後、笑いをこらえきれなかったのか噴出した。

「わかりやすい奴」

言い返そうとしたが、ぐっと堪えた。今は、ご飯が先よ！

綾君に、一応、お礼を言い、食べ始める。お腹が減りすぎて、自分が姉と呼ばれたこととか、この場所はどことか、笑われたとか、今はどうでもいい！

これが背に腹は変えられないってやつ？

2話 私が美少女!?

「美味しい！ このカレーって……もぐもぐ……綾君が……作ったの？」

「姉貴の料理は不味くて喰えないんだから、俺しか作れないだろ。てーか、飯喰いながら喋るな！ こぼしてんぞ！」

うつ、言っではいけないことを言っただな！ 凶星はついちゃいけないって学校で習わなかったか。餓鬼！ 料理ができたら、毎日、コンビニ弁当なんてしてないから！

私は大人だから怒ったりしないが、弟を睨み付け圧力をかけておく。……なんで赤くなる弟！ 空気読め！

「ところで、お父さんとお母さんは？ ——死んでなかったと思うけど」

「いや、勝手に殺すなよ！ 一昨日の朝に親父の仕事がなんかでイギリスに行っただろ！」

こっそり言っただのに、私の言葉の最後、聞こえていたの?! でも留守で良かった。

見つかったら——

『この女の人は誰かしら？ 綾』

『アヤが女の人を連れ込んだの？ ……さすがパパの息子ダ！』

『お、落ち着いて下さい！ お父さん！ お母さん！』

『あなたにお母さんなんて呼ばれる筋合いないわ！』

『アヤ、そこまでやられちゃったら、責任とってもらわないとネ！』

『そうね、パパ。日本のやり方でね』

『ワオ！ジャパニーズ！腹きりヲ！？』

逆のような気がする。でも、私は年上なんだから、きっと、こうなるわ。よくわからないけど、こういう時って土下座とかしたほうがいいのかしら？

「おい！姉貴！」

「うわ！ごめん！」

吃驚した！ 妄想から帰ってきた時は、周りの状況確認って難しいよね。

「何で、謝ってんだよ！ さっさと風呂入ってこい！」

頷いて、歩き出す。ご飯も美味しい、風呂も準備してあるなんて嫁にほしいぞ！ 口さえ悪くなければの話だけだね。

ふと、ごちそうさまを言ってなかったことに気づいて振返る。

「綾君、ごちそうさま。本当に美味しかったよ」

「当たり前だろ。姉貴好みの味にしたんだから……！」

「え？」

「な、なんでもねえ！ さっさ行けよ！」

顔を真っ赤にした綾君にお礼を言って、さり気なく早歩きで廊下に出る。

——当たり前だろ。姉貴好みの味にしたんだから……！

自然に言ってきたから、幻聴かと思った。自分の頬が熱をもってくるのがわかる。

さっきの言葉は、照れるよ！ 可愛すぎる！ 私の方が恥ずかしくなるなんて、どんな拷問なの！

ツンデレのデレの破壊力にやられてしまったらしい。

落ち着いてきた私は、大事なことに気づく。風呂場はどこ？！
今別れた綾君には、壮絶に聞きにくい。よって適当に歩いて探すことにした。

それにしても綾君は、29歳の女を捕まえて姉貴と読んでいたのよね。確か、Dearのゲームの主人公は、ヒロインピチピチの高校1年生で、綾君に劣らず美少女だったはずだ。間違っても、私には似てない！

あつ、そうだ！公式には書いてなかったけど、綾君は、0・0001な視力の持ち主なのかも！

うろちよると1〜2時間歩いて、やっと風呂場に着いた。脱衣所で服を脱いで、目の前にある鏡が、目に入る。

「嘘でしょ……これは本当に夢じゃないの？」

目の前には、ふわふわな銀髪を腰まで伸ばした、どこのお姫様だと思うような美少女が蒼眼が落ちそうなくらい眼を見開いていた。美少女は、私の動きを真似て動く。お肌はすべすべで、シミも皺もない。

はっ！ちょっと喜んでる場合じゃないわ。

これは認めるしかないのね——私は、Dearというゲームの主人公ヒロインになっていた。

3話 現状の把握！え？死亡フラグ！？

Dearというゲームは、私が当時高校1年の時にフルコンプリートした乙女ゲームだ。

もしも、夢を見るにしても、トリップする乙女ゲームがあるにしても、私は、絶対に、このDearというゲームは選ばない。なぜなら、姉から借りた、このゲームの趣旨が“狂愛されたい”だった。選択肢を選び、進んでいくうちに攻略対象キャラクターが、高確率で病んでいく。各キャラクターのトゥルーエンド以外は、主人公が死亡するという結末。高校1年の、純粋な私には、かなり、ショッキングだった。

鏡を睨み付けて、今の自分の姿を、目に焼き付ける——夢だとしても、死にたくない。

「絶対、生き残ってみせる！」

自分に喝を入れ、風呂に入り、自分の部屋に行く。

風呂場を探すついでに無駄に広い家を歩き回って、部屋の配置を確認して自分の部屋を見つけたから完璧だ。これからDearの主人公として生活しないといけないのだから記憶の整理と、情報収集をしなくちゃ！ 攻略対象達のLOVE度を上げなければイベントは起きないしね。

目指すは死亡フラグを総回避！

4話 いざ学校！ホスト教師？！スルー！

いくら考えても、ゲームの内容を詳細には思い出せない。

「もう！ 私の馬鹿！ 何で思い出せないの！」

布団に寝転がり、顔を枕に埋める。意味もなく、手足をバタバタさせてみる。

私、……何やってるんだ。29歳にもなって、見苦しい。今のゲームの主人公の姿でも、綺麗なお姫様が、こんな残念な行動してるなんて、やるせない。って脱線してる場合じゃない！

高校1年で16歳？時にやった以来だから、13年前！？ 昨日の晩御飯も思い出せないのに、13年前の記憶なんて思い出せるわけない！思い出すことを早々と諦める。29年も自分の、残念なお頭と付き合っているから、限界がわかってる——「生活しているうちに、思い出すしかないわね……」

詳細は思い出せないが、いくつかの、悲壮なバッドエンディングが、頭の中でリピートされる。

「うげえ、スプラッタ……」

自分の残念な記憶能力に呆れてか、現実に迫る死への恐怖なのか、涙が滲んでくる。29歳にもなった女が、そう簡単に泣いてたまるか！乱暴に布団に入り、ギョツと目を瞑って寝た。

翌日の朝、起きて気づいたこと、私は繊細な人間ではないということだ。昨日は布団に入って3秒もたたずに曝睡していたからね。

私は、未来から来た青タヌキ型ロボットの名前がタイトルの、主人公の男の子が頭によぎる。

いや、違うのよ！……って誰に言い訳してるのよ、私！

居間に移動すると、綾君がトーストとスクランブルエッグ（ベーコン付）を、ちゃぶ台に並べている。

「綾君、おはよう」

「おはよーって、姉貴！ まだパジャマなのか！ 今日は学校だろ」

「え？ ど、どうしよう？ 学校って何時から？」

「落ち着け！ 学校は8時半からで、今は、7時55分だから十分に間に合うだろ？」

なんだと！ あと約30分！？ 今から朝ご飯を食べて、着替えて、化粧して、学校に行くって全然、間に合わないよ！ せっかく綾君が作ってくれた朝食をかきこんでむせる。綾君が背中を摩ってくれたり、綾君がごく自転車の荷台部分に乗って、2人で途中まで一緒に登校したりとかイベントがあったけど、急いでいるから甘い雰囲気でもなんでもなかった。

恋人って言うより、なんていうか介護されてる？！

ピチピチの美少女高校生には化粧は必要なかったので、思ったよりも早く支度ができた。

今、高校の校門前に立っています！ 始業の3分前で間に合った——って間に合うわけないよ！始めてきた学校で、ここ何処？状態だよ。

昨日の情報収集で、主人公ヒロインのクラスは、1年1組だということとは知っていた。しかし、この広い学校で自分の教室を探すことは不可能だ。始業の鐘も鳴ったし、諦めよう！今日は学校を探検して建物の構造や配置でも知っておくか。無駄に広い学校を見渡す。

学校の探検をしようと、廊下をウロウロしていると——用務員さんに捕獲された。昆虫採取用の網で？

用務員さんは何故に、昆虫採取用の網とか持つてるのよ……迷いなく、私の美しい顔に振り下ろすとか正気なの！？半眼で用務員さんを睨むと、相手も不審な目で私を見てくる。

授業時間にウロウロしているなんて不審者だと思われたら——

『その女！ 怪しい奴め、お縄にしてくれる！』

『用務員さん、待って！私はこの生と——』

『言い訳は、お奉行様に聞いてもらえ！』

『そんな殺生シスコンなあ。私には病気の弟がいるんです』

痛い、痛い！ うわ！また妄想の世界に行ってた。

用務員さん、怪しい目で見るのはいいけど、網が、顔に食い込んでる！ 用務員さんに正直に迷ったことを告げると、少し笑った後、網を何処かにしまい、親切に案内してくれた。私は、網の模様が残った顔を摩りながら、用務員さんの後を付いていく。

私が1年1組についたのは始業の合図の30分後。教室に入つてすぐ、教師と目が合う。

この人は！攻略対象の教師だ！確か、藤宮^{フジミヤ} 恭^{キョウ}で29歳、数学担当。ホストにしかみえないイケメン教師。性格は、俺様でDSは基本装備。いつもダルそうにしているが、しっかり生徒を見守る良い先生で、生徒からの人気が高い。

「遅い！俺様の授業に遅れるとはいいい度胸だな！遅刻理由を言え！」

「す、すみません！学校で迷っていました」

「お前、入学して1週間もたってんのに、迷うとか器用だな」

「返す言葉もないです……」

「まあ、何でもいいから席に座れ。今日は1日中テストだ。遅れてきたからには、相当、自信があるんだろーな」

ニヤリと笑う藤宮先生を適当にあしらひ、教室に1つだけある空席に座る。

危ない！攻略対象キャラクターに目をつけられるなんて、自殺行為だよ！なんとかなつたかな？

テストは中学卒業した生徒の実力を知るためのものらしい。はつきり言つて、テストなんて無理だし、嫌いだ！でも中学レベルの問題はなんとか、解くことができた。平均点は取れているはず！

テストが全て、終わり放課後になった。——何故、誰も話しかけてこないの！

友達に話しかけてこられた時のために言葉を準備していたのに！

ゲームの知識を必死に思いだした。そういえば、男にモテるヒロインは女の、目の敵にされ、女友達がいらない。男友達は、ツンデレ弟に駆除されていた。……わかるよ！ 女子達！ 私も、可愛い女子なんて、全員、滅べと思ってたし！しかし、逆の立場になってみると、自分が美少女なんて、ありえない！ 寂しすぎる！

このゲームの主人公^{ヒロイン}は、友達がいらないらしい。
そんな学生生活は、青春を溝に捨てているようなものじゃないか！絶対に友達つくってみせる！

いきなり、今時の女子高生に話しかけるのは怖いから、大人しそうな子にしよう！……私って、どんだけビビりなの！？

私は傍から見てもわかりやすいほど、がっくりと肩を落とした。

チキンな主人公^{ヒロイン}って駄目かしら？

5話 女友達ゲットだぜ！

放課後は、ほとんどの生徒は帰宅したり、部活に行ったりでいなくなつた。たまたま隣の席に座っている女の子がいたので話しかけてみる。

「ねえ？今日のテストは難しかったよね？」

「はっ、はい！そうですね、トワさん」

「私の名前……」

「ふえ？トワさんの苗字って長いから……あ！」「ごめんなさい！私ったら失礼なことを言ってしまったね」

「いいえ！名前で呼んでもらえると嬉しい。私の苗字が長いのは、本当のことだし。今日のテストは、名前書くだけで、時間が終わるかと思つたわ！」

私の名前……ゲームの時はカタカナで名前をいれるのが私流。Dearというゲームは主人公の苗字は固定されているのでデフォルトのままだが。

製作者は厨二病か！と思うほど苗字が長い。思い出すのにも時間がかかり、冗談じゃなく、本気で名前書いてテストが終わりそうだった。

私の本当の苗字は佐藤だから！日本人で1番多い苗字で書くのも簡単！名前は覚えやすい。1つだけ欠点があるけどね！“佐藤さん”と呼ばれても、どの佐藤さんですかって、なるところとか。

「トワさんって、意外に面白い人なんですネ」

その後、話が弾み、2時間位して別れた。彼女は瀬戸^{せと} 可憐^{かれん}ちゃんで、最近、近所に引っ越してきたらしい。名前のように可愛らしい彼女は、控えめで優しい性格。“のほほん”という言葉は彼女のためにある！みたいな子だった。

やったー！ 初めての友達ゲット！

このゲームで友達というイレギュラーな存在を作ってしまったことに、後悔することになるのはずっと先の話だ。

6話 美人神主さん！到来！

帰ろうとして気づいたけど、家はどこだっけ？

都合よく弟が現れるはずもなく。とぼとぼ歩き出す。昨日は人気がない所を探して辿り着いたんだから、今日もそうやって行けば、家に行けるはずよね！

ちゃんと家に帰れましたよ。3時間後にね！まあ自転車で10分の所にある自宅に、どうやって3時間もかけたかは聞かないで。

家に近づくと、人の姿があつた。綾君じゃない、こんなボロい神社に御参りに、来た人かな？

とてつもなくイベント臭がする。遠くから観察していると、御参りに来た人が振り返って、私を見た。

「こんにちは。御参りですか？」

……いやいや、こっちのセリフだから！水色長髪の美人さん！

挨拶を返すと、美人さんがニコニコ顔のまま近づいてくる。笑顔の人が距離詰めてくるのが怖いって感じるのは、私だけ？ というか美人さん。背が高いよ！顔も近い！私の身長より、頭2つ分高い背を丸めて、彼に凝視されている。

「やっぱり！ 君がトワちゃんだよね？」

この美人さんの声、低い。男の人？

「ノリトさん?……」

驚いて、つい声にしてしまった。

この人は攻略対象じゃん!……蒼井^{アオイ} 則斗^{ノリト}。水色の長髪美人。年齢は忘れたけど、神主がいらないボロ神社の神主代理をするために、一緒に住むことになるお兄さん。常に笑顔で、何考えているかわからない人。私がゲームやっている時の印象は、腹黒な美人!この人のバッドエンドが一番、壮絶だったから、その他の情報を忘れた。

「あれ?僕のこと知っているの?」

ヤバッ!主人公^{ヒロイン}ってノリトさんのこと知らない設定だったよ。どうやって誤魔化そう?

考えていると、いきなり腕を引っ張られる。私は、ギャ!と女の子にあるまじき悲鳴を上げて、ノリトさんの腕の中にいた。……女の子って年じゃないからいいのだ!

「トワちゃんは、表情がくるくる変わって可愛いですね」

“ドキドキする”

この言葉でわかってくれる人が、何人いるかわからないがこの表現は、恋する乙女以外でも使える。それは、恐怖に脅える時だ。

6話 美人神主さん！到来！（後書き）

次の話は15Rで残酷描写有です。注意してください。

7話 15R 美人神主と危ナイ過去！（前書き）

残酷描写が有ります。嫌いな方は、避けてください。お願いします。

7話 15R 美人神主と危ナイ過去！

ノリトさんのバッドエンドは、今でも鮮明に思い出せる。

バッドエンドルートに入ったこと気付かずゲームを続けていると
2つの選択肢がでてくる。

1つ目は“一緒になる”

2つ目は“断る”

これは、結婚のことだな！と1つ目の選択肢をほいほいと選んだ。

“一緒になる”

『ありがとう。トワちゃん』

いつも通りの笑顔で近づいてきたノリトさんは、私を抱きしめる。
次の瞬間、胸に衝撃が走った。

『の……りとさん？』

私が刺されたと認識した時には、次のナイフが迫っていた。
滅多刺された私が、動かなくなったことに満足したノリトさんは

私だったモノを、むっしや、むっしやと……食べた。

『これで、ずーっと、いつしよ、だよ』

顔や服を真っ赤に染めて綺麗に笑うノリトさんは、私の名前を呼ぶ。
シアワセソウニ。

「トワちゃん！」

ノリトさんが、私を呼ぶ声で回想から戻ってきた。彼が本当に心配そうにしてくれている。でも、私にとっては地獄の続きを見せられているようだ。本能的な恐怖に、鳥肌がたつのが止まらない。

この人は、まだ、あのノリトさんじゃないってわかっているのに！

「姉貴！」

私は、綾君の声が聞こえたことに安堵の息をはいて、気絶した。

7話 15R 美人神主と危ナイ過去！（後書き）

なんかすいません。

8話 同居？遠慮します！

「……せ！……てけ・・・」

うるさいなあ……もう、朝？ 今日学校だっけ？

私が目を覚まして、初めに目に入ったものは、ノリトさんが綾君を、押さえ込んでいるところだった。綾君は、怒って顔をゆで蛸のように真っ赤にさせ、暴言を吐きまくっている。対称的に、ノリトさんは相変わらずの笑顔で、綾君をなだめているのか、煽っているかわからない言葉で話している。

おかしい……いや、画的には、正しい。美少年が美人なお兄さんに、押さえ込まれている。しかし、美少年こと綾君は、間違っても不良なのだ。こんなに、大人と子供の、力の差といえるほど弱いはずがない。

とりあえず、今は場を収めないと！

「2人とも、何してるの？」

「姉貴！ 目覚めたのか……くっ」

綾君は、嬉しそうな顔をした後、現状を思い出したのか、抵抗を続けていた。ノリトさんは、その声が聞こえていないようで、押さえこむ力もそのままに、私に話しかけてくる。

「ああ、トワちゃん。もう大丈夫ですか？ 気分は悪くないですか？」

「は、はい。ご迷惑をかけてしまって、すみません」

「それは良かったです。」

「おい！ロン毛野郎、さっさと手を離せよ！」

「それは嫌ですね。離したら、綾くんは僕を殴ろうとするでしょ？」

「当たり前だ！ボコボコにして、そのロン毛を引っこ抜く！」

「引っこ抜かれても、僕は、後ろから着いて行きませんか？」

「なんの話だよ！本気でムカつく！」

ピクミ。とか大分前のゲームを持ち出してきましたね、ノリトさん。ピク。ンなら、引っこ抜かれたついでに食べられちゃって下さいよ。私の安全のために——じゃなくて、喧嘩止めなきゃ。

「弟にはノリトさんを殴らないように、十分言い聞かせますから、離してもらえませんか？」

「そうですねえ。どうしましょう」

「殴ったりしないわよね！（逆らったら、痛い目に合わすぞ。）綾君？」

姉わたしの満面の笑みという圧力をかける。綾君は、ノリトさんと私を見比べた後、静かに頷いた。

偉いぞ、それでこそシスコンだ！　いい弟を持って姉（偽者だ
ど）は嬉しいわ。

それから話は進んだ。ノリトさんは海外で、主人公と綾君の両親
にスカウトされて、住み込み、3食付きでボロ神社の神主になるこ
と承諾した。らしく、ゲームの正規の流れ通り、同居することにな
った。

両親よ、何故に海外で、わざわざスカウトするんですか！　殺人
鬼（まだ違うが）を家に住ませるとか、両親は鬼畜過ぎるわ。子
供を崖下に落として、登ってきた子供だけを育てる教育方針なの！？

ノリトさんは自己紹介をすると、質問はないかと聞いてきた。そ
の言葉に、目を輝かせた綾君が、質問を浴びせ続ける。敵意とかじ
やない意味で。

落ち着いた綾君は、状況を理解した途端、手のひらを返したよう
に、ノリトさんに懐いた。なんでも、男兄弟が欲しかったらしい。
現金な奴め！

姉の立場は、どうなるのよ？　可愛さあまって、憎さ百倍なので
報復します。目を潤ませ、今にも泣きそうな顔を作り、弱々しい声
を出す。

「綾君は、お姉ちゃんなんて、もういらないのね……」

それを見た綾君は、何らかのショックを受け、自己嫌悪モードに
入った。居間の隅で、体育座りをしてブツブツと独り言を言ってい
る。当分は、大人しくしているだろう。

ノリトさんに話かけようと振り返ると、すぐ傍にいたらしく、軽く肩を抱かれて顔を覗き込まれる。笑顔が怖い。近いよ、来ないで！来ないで！誰か塩を持ってきて！？

ノリトさんの手が動く。そして、私の目元に手を持っていき、さっきの（嘔泣きの）涙を拭ってくれた。優しいな、ノリトさん。お礼を言おうと口を開く前に、ノリトさんが話しかけてきた。

「トワちゃんは、泣き顔も可愛いですね……」——泣かせたくなる。

最後にボソツと聞こえた声に、魂が口から出てくる思いだ。血の気が下がっていく、今の私は、さぞかし顔が、快晴の空のように真っ青だろう。こんなイベントあったけ？

その後、いつの間にか復活した弟は、ノリトさんと私を引き離れた。そして、ノリトさんに喧嘩を吹っ掛けていた。姉に近づく男は許せないそうです。……呆れつつも思ってしまう。もっとやれ。

喧嘩の途中にノリトさんは何かを思い出したようで、私を見る。

「トワちゃんも、僕には敬語じゃなくてもいいですから」

「はい。考えておきます」

ノリトさんは、私が敬語のままであることに不満なのか、一瞬だけ悲しそうな顔をした。

そんな顔しても無駄よ！あなたのフラグは絶対に立てたくない。

つまり、仲良くする気はない！

9話 ツンデレ弟！健全は不健全！？

次の日、学校から無事に帰ってきた私は、神社の境内でほうきを持って、掃除をしているノリトさんに出会った。仕事なので、神主服を着ている。ノリトさんはいつもの2倍は美人度が上がっている。

制服とか、萌える！ ハア、ハア

弱冠、息が上がった私は、危ない不審者に見えるだろう。いつか、本物の主人公^{ヒロイン}に身体を返せって言われそう。いつでも返すけどね！私に気付いたノリトさんが、掃除を止めて、いつもの笑顔で近づいてくる。

「トワちゃん、おかえりない」

「ただいま。綾君は家にいますか？」

「さっきまでいたんですが、味噌と醤油を買ってくるって出かけましたよ。急用ですか？ 僕でお手伝いできるなら喜んでしますけど」

「違うの！ 聞いてみただけだから、何の用事もないわ！」

慌てて敬語がなくなったがしょうがない。

「そうですか？ トワちゃんが望むなら、何でも協力しますから、いつでも来てくださいね」

そう言って、掃除に戻っていった。

どうして、ノリトさんは、話を大げさにもつていこうとするわけ？

そもそも、綾君がいないのはノリトさんのせいだ。ノリトさんは細腰な美人という、みかけのわりに、よく食べるのだ。そして、和食好き。しかし、綾君は主人公ヒロインが洋食好きなため、洋食作りを極め、和食はあまり作らない。そのため和食用の調味料は少なかった。それなのに、ノリトさんは和食を要求し、大量の食事を胃袋に納めた。よってこの家はオイルショックならぬ、調味料ショックを起こし、綾君は、買物に行った。という短いようで長い経緯があった。

え、私が好きな料理？ 長きに渡るコンビニ生活のせいで、私は何でも食べられるし、好きだ。あえて言うなら、手作り料理と、家族で囲む御飯に、飢えている。

私は、ノリトさんにお礼を言うと、早足で家に入った。扉を丁寧に閉めて、ニヤリとする。今日は、ある重要な目的をはたすのだ。綾君がいないのは好都合！

私の目的、それは綾君の部屋に侵入すること。昨日、寝る前に思い出したのだ。

実は、綾君は攻略対象キャラクターではない！ 綾君はなかなかの人気で、ファンディスク版が出た時には、攻略対象だからうっかりしていた。

それで綾君の役割なのだが、乙女ゲームに時々ある、家族や友達は協力者でしたパターンだ。綾君は攻略対象キャラクターのLOVE度を教えてくれる便利キャラクター。ゲームをやっていた当時は、

綾君の部屋に入り浸り、状況確認をしていた。

その機能は健在のはずよね！

問題はどうかやって聞きだすか――

『綾君、聞きたいことがあるんだけどいいかな？』

『なんだよ、姉貴』

『ちよつと攻略対称キャラクターのLOVE度を教えてくれない？』

『あゝあ？ 意味わかんねえ。こつりゃくたいしょうキャラクター
つて人か？ ラブ度つて何だ？』

『なんていうか、仲良し度みたいなの』

『で？ “誰の” が知りたいんだ？』

『今のところ、ノリトさんと高校の数学教師で藤宮 恭先生かな』

『……わかった。直接、聞いてきてやる』

『ええ！ 困るよ。そんなの恥ずかしすぎる！』

綾君に聞きにくるのも緊張したのに！

『安心しろ。 姉貴が結果を知る時には、 2人は、もういないから

――それじゃ、いつてくる』

『意味深発言過ぎるよ！ “ 2人は ” と、 “ もういないから ” の間
に、 “ この世に ” って入りそうだから！ ちよつと待ちなさい……
つてもういないしい！』

現実的に言つて、絶対無理！ よつて家宅搜索をすることにした。

「私の命のためなんだから、綾君にプライバシーはないわ！」

綾君の部屋に入る。……なんか、思っていたより質素ね。ベッド

や勉強机、本棚とタンスがある畳の部屋。参考書や教科書があつて、脱いだ学ランもきちんと、ハンガーにかかっている。何の問題もない普通の部屋。

問題大有りよ！異常すぎるわ！

綾君は中学3年生、思春期のまっ盛り。だというのに、女性の間どい姿を撮ったポスターや、エロ本どころか、グラビア本もない。そして、漫画雑誌すら1冊もない。

これじゃあ、健全どころか不健全だよ。どうした！綾君！

LOVE度の情報だつてまだ、手に入れてないし。あと探してない所つて、ベッドの下と鍵の掛かった勉強机の引き出しだけ。

鍵があるんだから、開かないと思って触らなかつたけど、一応、試してみるか！

結果、開いた……でも、開かなければ良かった。引き出しの中には、姉が^{ワタシ}写った写真が、何枚も入っていた。現在の高校セーラー制服（明らかに隠し撮りなもの）から、果ては、乳児期の写真。

綾君、私に何を求めているのよ！？ うう、見なかつた事にしよう。気を取り直して、ベッドの下をあさる。

ベッドの下にエロ本があるのは、定石だ。絶対あるに決まっている。手に何かが当たった。

キタ！ 取り出してみると、それは

「ノート？」

くたびれたノートは所々、暗赤色にくすんでいる。血とかじゃない事を、真剣に祈る。表紙には、“抹殺者リスト（要注意者編）”と物騒なことが書いてあった。ノートを、恐る恐る開く。

ノートには――

フジミヤ キョウ
藤宮 恭 殺殺殺

アオイ ノリト
蒼井 則斗 殺

と書いてあった。

怖っ！ 何なの！？

私が、考え抜いた末の結論を言うと、あれは限りなくLOVE度に近いものを示すモノ。私と仲がいい人は、綾君にとって邪魔なのだろう。その結果、この表現が用いられたとか。多分。

でも、そう考えると私は、藤宮先生と仲が良いことになっている。そんなに話した記憶ないんだけど？ まあ、知らない間に、変なフラグ立っていることは、時々ある。注意しないとね。

むむ？ 何かおかしくないかい？ ノリトさんは、ともかく。藤宮先生は、高校教師である。しかし、綾君は中学3年生。高校と中学の校舎は少し離れた所にある……どうやって調べた！？

疲れきった私は部屋に帰り、布団に入る。今日あったことを頭の中で整理する。収穫は、いろいろとあった。しかし、（精神的に）失ったものが大きかった。

「なんか、どつと疲れた！」

そう言った私が、眠りにつくのは3秒後のこと。

10話 日常!どうでもいい?下着の話!?(前書き)

今回は恋愛要素が皆無のトワ達の家の日常です。皆が下着についての話をしています。皆が暴走しています。危なくないと思います
が、不快だと思う方は、注意して下さい。

10話 日常!どうでもいい?下着の話!?

今の生活に慣れ始めた、ある休日のこと。

3時はおやつの時間よね! 私は、台所からコンビニの菓子パンを入手して、機嫌よく鼻歌を歌いながら、部屋に戻るため、きしむ廊下を歩いていった。その途中で、廊下にある黒電話が、鳴る音がしたので、受話器をとる。

「もしもし?」

「——もしもし、トワさんですか?」

「はい、そうですけど。どちら様ですか?」

「——今日の、パンツは何色?ハア、ハア、」

キタツ!?変態さんからの電話が。まあ、こういう電話は珍しくない。

私はトリップしてきてから、美少女というものになってしまった。そのため、後ろから知らない人が付いてきたり、迷惑電話が、かかってきたりすることは体験した。美少女は罪ね!なんて最初はアイドル気分で楽しんでいたが、何度もあると、飽きたので電話対応のほとんどは、綾君やノリトさんがしてくれていた。

対応としては、綾君は電話に、ぶち切れ、怒鳴った後に受話器を、乱暴な動作で戻していた。ノリトさんは、笑顔で、呪文?みたいな言葉を話し、電話の相手に精神攻撃らしきものをしていった。そのおかげで、ずいぶん多数の迷惑電話が減った。

今日はすっかり電話をとってしまったので、対応する。

今日の私は、機嫌が良いから、ちょっとは相手してあげますか！
さっきから同じ言葉を繰り返す変態さんに意識を戻す。

「——ハア、ハア、今日の……パンツ……何色？」

「今日は確か、ピンクで豹柄よ」

「——ハア、ハア、か、形は？」

「うーんと、なんていうのかしら？」

ボクサー？と答えていると、綾君が鬼の形相で、私の前に走ってきた。そんなに走ったら、床抜けるよ。この家は神社共々、ボロいんだから！

「姉貴！ 誰と話してんだ？」

「えーっと、変態さん？」

「おい、すぐに切れよ！ 普通に対応してんじゃねーよ、馬鹿！」

綾君に受話器を奪い取られ、説教を受けた。姉貴がそんな対応しているから、迷惑電話がなくならないとか——それは初耳だわ。あの電話を受けると、なんというか。なんというか。

血が騒ぐのよね！……あ、断じて興奮するとかじゃないから！

美少年、美青年を見ると思わず、ハア、ハアしちゃうような同属の血が騒いじゃうのよね。私が、29歳まで捕まらなかったのは、ひとえに、ゲームのキャラ達にしか心を奪われなかった。そのため、ストーリー行為をする手段がなかったというだけだ。

今だって、トリップした乙女ゲームがDearじゃなかったら、毎日のように美少年、美青年を追いつくのに！

「聞いてんのか、姉貴！」

「うえ！ ごめんなさい……何の話だったけ？」

「変態と何を話してたんだよ？」

「今日のパンツについて聞かれたから、ピンクの豹柄ボクサーって答えただけよ。」

「姉貴、そんなパンツ持ってたか？」

洗濯ついでに、姉のパンツをチェックしているなんて、流石シスコン弟ね！

「私は持ってないわ。綾君のだよ？」

「俺のかよっ！ それを変態に話すって本気でありえねーし！」

だって、誰のパンツとは言ってなかったんだよ！と心の中で反論する。これを言ったら最後、ものすごく、怒られるに決まっている。29年間の生活で反論したら、倍返しにされるということを学んだのだ。とくに狡猾な姉には、度々、罠にはめられていた過去が大きい。

く、私を我慢強い子に成長させた。

綾君の説教を右から左に流していると、ノリトさんが近づいてきた。

「綾くん、何かおもしろ……不思議な話をしていますね？」

普通に素が出ましたよね！？ 面白い話って言いかけていたし！
この腹黒！ イケメン！

私が心の中で、ノリトさんを罵倒していると、話が進んでいく。

「そんな電話があつたんですか。トワちゃん怖かったでしょうね。
大丈夫ですか？」

別に……なんて言えないよ！ 言ったら変なフラグ立ちそうだから！ 私が無言でいると、怖がっていると思ったのか、綾君が話を変える。

「そういえば、ノリ兄の洗濯もしてるけど、パンツとか見たことねえな」

「え？ちゃんと毎日出していますけど？」

ノリトさんは、そう言つて廊下の窓から見える洗濯物を見る。視線の先には、快晴の下に気持ちよさそうに風に揺れる、白く長い布？……

ふんどし、ですって！？ 今時、萌え業界にも、そんなに需要の

ないものを履かないで！

綾君は気付かないようで、やっぱりないじゃん、と、ノリトさんを不思議そうに見ていた。硬直した私に気付いたノリトさんは笑顔で話しかけてくる。

「トワちゃんはわかったようですね？」

聞かないで！ セクハラよ！？ と思いつつ、自然とノリトさんの下半身に目がいつてしまう。ノリトさんは、何を勘違いしたのか、してないのか話を続ける。

「そんなに僕が気になりなすか？」

「気になってないわよ！ふんどしに興味があっただけよ！」

「「「……………」」」

しまった！ 本音が出てしまったわ！

3人に沈黙が広がる。その後、最初に口を開いた強者はノリトさんだった。

「そんなに興味があるのでしたら、僕の……見ますか？」

もう何も言うまい。魂が口から完全に出た私は、遠い目で外を見る。洗濯物が気持ちよさそうに揺れているところが、再び、目に入る。その横で、綾君がふんどしをすれば……という不穏な言葉は聞こえてないことにしよう。

その数日後から一時期の間に、洗濯物からボクサーパンツが消え、干してあるふんどの数が増えたことなんて、家事を一切しない私は知らなかった。

10話 日常!いつでもいい?下着の話!?(後書き)

読んで下さった方、ありがとうございます。

11話 爽やかスポーツ少年？と厄日！？

いつも通り、遅刻ギリギリの時間に学校につく。私の寝起きが悪いとか、支度に時間がかかるから、ではない。遅刻をしたくない私は、早くに準備を済ませている。綾君を置いていってでも、家を出てやると思っていた。居間で新聞を読んで、のんびりしている綾君に、先に出ると伝える。

「姉貴の足じゃ、3時間経っても学校に辿り着けないだろ。黙ってチャリの後ろ乗ってるよ」

生意気な言葉と、表情のわりに、目は捨てられた犬のように潤み、言葉に元気がない。

うつ、言外に一緒に行きたいと言っんじゃない！

結局、置いていくことができず、遅刻をしたり、しかけたりしている毎日だ。

教室に行くため急いでいると、廊下の角から出てきた人と衝突した。私の華奢な身体が、反動で後ろへ傾く。硬い床に倒れる衝撃を覚悟して、目を閉じる。

あれ？痛くない？いくら待っても衝撃は来なかった。目を開くと、私は、誰かに抱きしめられていた。

「君、大丈夫？」

目の前には、爽やかな美形男子高校生がいた。私は、この人に衝突して転ぶところを、腕を引っ張って助けてくれていた、らしい。体格が良くて、男前な美形だなあ、背はノリトさん位か少し上かな？と観察していると、不思議そうな顔で見られる。

「ごめんなさい！ 私の不注意でぶつかってしまって……」

「はは、いいって、オレも急いでて、前見てなかったし」

そういうと、彼は、私が来た方向へと歩き出す。私、お礼を言い忘れていたわ！

「助けてくれて、ありがとう！」

去り行く彼の背中に、言葉を投げかける。その言葉が聞こえたのか、彼は、振り返らないまま片手を上げて、ひらひらと返した。キザねえ……

今、イベント起きなかった！？あの人も見たことある気がする。

考え込んで気のせいだと結論を出した時には、彼の姿が見えなくなっていた。私が、教室へ歩き出すため足を動かすと、何かにつまづいた。足下を見ると、1冊の本が落ちている。

「さっきの人の本かしら？」

拾って本を見る。表紙には数学？と書いてあった。数学？ってことは上級生ね。あとで返そうと思い、革の鞆に本を入れる。

教室に入ると、いつもよりも生徒達に、落ち着きがなかった。生

徒達は皆、何枚かの白い紙を持っているようだ。軽く教室を見回している、ホスト教師こと藤宮先生が、私を見ている。

「お前、いい度胸だな……俺様の授業に遅刻するのは何回目だ！」

「す、すみません！もうしませんから、お許しを！」

「その言葉を聞いたのは3回目だ。お前は放課後、数学準備室に来い！ さつき、こいつらには、この前やったテストを返したが、お前のは、放課後に渡す。来なかったら分かってんだろっなあ？」

目をつけられた！？ もう、全ては綾君のせいよ！

死亡フラグは、まだ立っていないはずだとは思うが、怖すぎるわ。授業は始まっていたが、すっかり元気をなくし、机に突っ伏した。2時限目が終わって休み時間になり、生徒達はガヤガヤと話にふけていた。隣の席にいる可憐ちゃんが話かけてくる。

「トワさん、大丈夫ですか？」

「大丈夫じゃないわ。先生に呼び出されるなんて最悪よ……あれ？ 可憐ちゃんも元気ないわね？ どうしたの？」

普段から色が白くて、可愛い可憐ちゃんは、いつもと違い、少し顔が蒼い。思いつめた顔をしている気がする。少しして、決意したように、いきなり動き、私の両手をつかんだ。

「私、私……トワさんをお願いがあるの！」

「お、落ちついて、可憐ちゃん！ 私でできることなら協力するか

ら」

「ありがとうございます。……実は今日、学校に来る途中で、変な人に襲われて……」

可憐ちゃんの話聞く、時々、言葉に詰まる彼女を急かさず、優しい目を向けて話を促す。話を全て聞き終わり、言葉を整理する。

「それで男子高校生に助けてもらったことでいいのよね？」

「はい！ そうなのです。とても素敵な方でした」

その場面を思い出したのか、顔をほんのり桃色に染めた可憐ちゃんは可愛かった。思わず守ってあげたくなるオーラを出している。これが庇護欲を誘うってことかしら？ 同時に変態の気持ちも誘ってしまうのが難点よね。私は、可憐ちゃんに気付かれないに、小さく息をはいた。

「助けてくれた人に、お礼が言いたいのです。でも、上級生なので会いに行くのが怖くて……」

「その人は何年の誰かは、わかるのね？」

「はい！ 任せてください！」

そう言うと、可憐ちゃんは制服のポケットから小さな手帳を出す。

「彼は、オオタニ タクマ 拓真（17歳）さんです。私たちと同じ高校の2年5組に所属している上級生で、趣味はスポーツです。身長178センチ、体重69キロ。現在の部活は野球部ですが、いろんな運動部

に助っ人として参加しています。家ではゴールデンレトリバーを飼っているようです——」

ええ？ どうしたの、可憐ちゃん！？ いつもとキャラが違うよ！ っていうかその手帳は何なのよ！ 可憐ちゃんは、動揺している私に、追い討ちをかけるように話を続ける。

「——家族構成はいたって普通の4人家族で弟が1人います。これでわかりました？」

可憐ちゃんの説明を聞いて思い出したが、その人は攻略対称キャラクターだ。知らないはずがない。それに、分からないって言うたら、さっきと同じ内容の説明を、正確にリピートするのでしょうか？

私たちは、昼休みに2年5組に向かうことになった。ついでに中庭で、お昼を食べることに決まり、綾君の手作り弁当が入った、革の鞆を持っていく。

「大谷先輩はいますか？」

2年5組について、すぐに教室の中にいる先輩に取り次いでもらうため、そこら辺にいる生徒に話しかける。話しかけた男子生徒は、私を見て顔を真っ赤にさせて、2つ返事で大谷先輩を呼びに行ってくれた。……美少女って便利よね。そう思いつつ、教室の中へ入っていた男子生徒を見る。

「おい、拓真！ 可愛い子達がお前に、会いに来てるぞ！」

「ん？ そうなのか？ ちょっと言うてくるわ」

「告白じゃなかったら、紹介しろよ！」

「はは、誰がするかよ。バーカ！」

そう言っ出てきた人は、朝に私がぶつかった爽やかな美形男子高校生だった。

「あれ？ 君は朝にぶつかった子だよな？ お礼は聞いたけど、どうしたの？」

「この子の方が、用事があるのよ。ねえ、可憐ちゃん？」

可憐ちゃんに話すように促す。可憐ちゃんは恥ずかしそうに前に出て、何度もお礼を言った。その姿を見ていて思い出す。この人の落し物を渡さないとい！ 自分の鞆をあさっていると、キャ！という悲鳴が聞こえる。可憐ちゃんが、よろけている姿が目に入る。廊下で歩いていた人とぶつかったようだ。私は支えようと、手を伸ばす。間に合った！と安心したのは一瞬で、可憐ちゃんの体重を、この細い身体では支えきれず、一緒にバランスを崩す。

「おっと、2人とも大丈夫か？」

私と可憐ちゃんは、大谷先輩の腕で支えられていた。そして、2人とも同時に大谷先輩から、素早く離れた。可憐ちゃんは恥ずかしさから、この行動をとったのだろう。私は――

これ以上、LOVE度を上げてたまるか！ こっちら命がかかってんのよ！

そんな心情だ。しかし、お礼はしっかり言うわ。偉いぞ、私！

可憐ちゃんもお礼を言っている。

「ありがとう。助かったわ」

「はは、今日は2人とも災難だな。まあ、こっちは役得だけど」

え？ 意味が分からず首をかしげる。大田に先輩は爽やかに笑って言う。

「ほら、両手に花つてやつ？」

可憐ちゃんは、顔を益々赤くさせている。私は、無表情に、大谷先輩をじつと観察する。

爽やかは、爽やかなんだけど、なんかイメージが違う？

変な違和感があったが、気を取り直し話しかける。

「大谷先輩、朝に落とし物をしなかった？」

「ああ、本を1冊、なくしたんだ」

「これですよね？ 教科書がなかったら困ったんじゃないですか？」

「君は、中身見てないの？」

その言葉に頷いて、本を渡す。

当たり前でしょ！ 教科書なんか見ても楽しくないわ！

「へえ、本当に？」

「なんでそんなに聞くのよ。ただの教科書でしょ？」

大谷先輩は、ほらと言いながら、本を開いて見せてくる。その本の内容は、女の人の、ほにやららな、姿を載せているエロ本だった。

「なんでそんなっ！」

「はは、本当に見てなかったんだな」

大谷先輩は、全く悪気もなく話す。

流石の私でも、実際に見せられると顔が赤くなる。女にそんな物を見せるな！ そんな物を学校に持つてくるな！

「これは俺のバイブル。授業中に見てんだ、とくに藤宮の授業ってつままないだろ？」

やっぱりイメージが違う！ 大谷先輩はこんなセクハラ親父みたいな性格だったかしら？

考え込んだ私は適当な相槌をした。その後は、会話を少しして分かれる。昼を食べるために、可憐ちゃんと、中庭に行った。考えながら食べたせいか、綾君の手作り弁当の味がわからなかった。

あんなセクハライベントは、ゲームに全くなかった。ゲームをしていても、大谷先輩は、こんな残念な性格ではなかったはずだ。もっと普通に爽やかなスポーツ少年で、ゲームを進めるうちに、少しずつ歪んでいったという展開だった。

D e a rの世界に、私が登場したことで、何かが、変わっているの？

私の心には、不安が渦巻く。午後の授業に集中できないまま、放課後になり、帰宅した。

12話 ホスト教師！回避できない！テスト返却！？

私は昨日、重大なことを忘れていた。

「藤宮先生の呼び出しを、ころっと忘れて帰ってしまうなんて！私の馬鹿！」

学校に来て、教室の席に着いてから思い出したのだ。素早く時間割を確認すると、今日は藤宮先生の数学はなかった。安心して息をついた。できるだけ、怒らせないように作戦をたてなくちゃならないわ！

素直に謝ったところで許してくれるかしら？――

『藤宮先生！ ごめんなさい！ うっかり忘れて帰っちゃいました！』

『そうなのか、じゃあしょうがねえな！』

『そうですよね！』

『はははは』『ふふふふ』

こんなことになるわけ絶対ない！むしろ――

『藤宮先生！ ごめんなさい！ うっかり忘れて帰っちゃいました』

……』

『お前は、よほど、俺様の罰が受けたいようなだな？あゝあ？』

『お許しを！ お代官様！』

『俺様は教師だ！ 今度という今度は許さねえぞ！――』

『あれ、藤宮先生？ 何処に行くんですか？』

『お前の、この壮絶に悪い点数のテストを、掲示板へ貼ってくる』

『そんな待つて！ ああ！ 行っちゃった。藤宮――』

勢いあまって声がでる。

「——先生の鬼！ 悪魔！ トS！」

「ほお、誰がだ？」

「そりゃあ、藤宮先生に決まって……！」

目の前には、笑顔を浮かべた藤宮先生がいた。どうしてここに！
？ 私は、ビシリと氷のように固まる。

「お前、強制連行！」

「いやあああああ！」

必死の抵抗もむなしく。藤宮先生にずるずる引きずられ、連行された。どこかの部屋に入っすぐに、煙草の臭いが鼻につく。キョロキョロと見回すと、灰皿に煙草の吸殻が山のように盛られ、プリントや教科書が、うず高く積まれた部屋であることがわかる。

「藤宮先生ここはどこですか？」

「見りゃあ、分かるだろう。数学準備室だ」

どこが！？ どうやっても、ただの汚い部屋にしか見えない！

「ほ、他の先生は？」

「なんか知らねえけど、“この部屋は耐えられない”とかで違う場

所にいるぞ」

この俺様教師のことだ、他の数学教師の掃除を促す再三の注意を無視して、この自分だけの城を作り上げたのだろ。他の先生達の苦勞が目に浮かび、同情していると、藤宮先生に話しかけられる。

「で？ 連れて来られた理由^{わけ}は分かってんだろ？」

「せ、せ、先生！ 私は授業がありますので、失礼します！」

身を翻し、扉に向かって歩く。扉に手をかけて、力をこめる。

ガチャ、ガチャ、ガチャ！……………開かないですって！？

後ろから、藤宮先生が無言で近づく足音がする。振り返って、後ずさりすると、すぐに背中が扉にあたる。扉と先生に挟まれた。左右にさり気なく動こうとした瞬間に、先生の両手にガードされ、身動きが取れなくなる。先生は、私の耳に、顔を近づけてくる。

「俺様がお前を、簡単に逃がすと思ったのか？ よく分かってないようだから教えるが、今は放課後だ。誰も来ないぞ」

ひiiiiiiii！ やられる！ お父さん、お母さん、先に逝く娘を許して！

「殺すなら、痛くしないで！ 一瞬でお願いします！」

「……………ばあか、何を勘違いしてるか知らねえがな。俺様がこれからするのは説教だ」

「へ？」

思ってもいなかった言葉に、キョトンとして間抜けな声を出してしまふ。意外に普通なので安心した。そんな私に言葉を続ける藤宮先生。

「死んだほうがましだと思っただけ後悔させてやる」

普通じゃなかった！？

「長くなるからな、俺様は座る。お前も、そのソファに座れ」

逃げられないなら、諦めるしかないわね。ソファに座ろうと指定された所に行く……ソファが見当たらない！ 見渡しても、あるのは書類や教科書などの本の山だけ。

「藤宮先生。ソファって何処に？」

「あゝあ？ 書類退かせば、そこら辺にあんだろ」

探すとは茶色の革張りソファがあった。自分が座る分だけ書類を退かし、周りの教科書などが崩れないように、慎重に座った。

「おい、最初に、この前のテストを返すぞ」

返された5枚のテストは、悪くない点数だった。苦手な英語も29点であった。0点は免れた。それなら、怒られるのは遅刻のことかと、身構える。

「そのテストを見て、思うことはあるか？」

「そこそこの点数だと思います」

「点数はな。他には？」

先生が言いたいことが分からない。首を傾げながら藤宮先生に聞く。

「問題があるようには見えませんが」

藤宮先生は大げさに溜息をついて、煙草を吸い出す。

「名前だ。な・ま・え！」

「何も問題ないじゃないですか！」

「この阿呆が！ 名前の欄に“れんじょうじ”Torauumaトワ”ってなんだよ！まず、お前は小学生じゃないんだから苗字くらい漢字で書け！」

しょうがないでしょ！ あのテストの時は、この世界に来て2日目だ。簾穰寺れんじょうじなんて難しい漢字が書けなかった。そこは多めに見て欲しい。

藤宮先生のほうを向くと眉間に皺をよせて、3本目の煙草に火をつけている。

「他にもあるぞ。この英字の部分は、ローマ字だな！」

「はい、そうです」

「そうか、じゃあ、お前の名前を言ってみろ！」

「れんじょうじ 簾穰寺」トウルーマ「トワです」

「そのテストにはトラウウマって書いてあんだろっか！」

ぐっ！ 私は英語が昔から苦手だった。ローマ字ですら、できなかった私が、努力の末、この名前を書いたが、“トウ”と伸ばす文字が分からなかった。苦肉の策で、これを書いたのだから、むしろ褒めて欲しい。

「お前は自分の名前すら書けねえのか！」

「すみません……」

私は、“さとう 佐藤 永久”だとか、違う世界から来たなんて言えるわけがない。言ったら、頭がおかしいと思われるだろう。

本当の自分を知っている人がいないなんて、つらい。私がしつかりしないと、しげん 佐藤永久が消えてしまうような気がする。悲しさで涙が、滲んでくる。

「おい、泣くな。罰として、自分の名前を1000回を書いたら許してやる」

鬼！ 悪魔！ ホスト！ と心の中で唱えながら、名前を書いた。その間は、藤宮先生の説教は続いていた。

その後、手の感覚がなくなったところに、終わった。窓の外を見ると、日が沈んで、真っ暗だ。

「それじゃあ、藤宮先生。帰ります」

「おい、待て」

「まだ何か、あるんですか？」

「お前を送る」

どうせ、暗闇暗殺ルートだろう。誰が行くか！

「いりません。遠慮します！」

「お前に拒否権はない、黙って着いて来い。」

数学準備室に連れてこられた時のように、引きずられて行く。連れてこられた場所は、職員用の駐車場だった。夜遅いせいか、1台の車しか残っていない。

「このド派手な赤いスポーツカーは藤宮先生のですか？」

「おう、カッコいいだろ！ 今日特別に乘せてやる。嬉しいだろ？」

嬉しくないです。なんて、口が裂けても言えない。

ド派手な車に乗せられた。家には自転車で10分しかかからないのだ。我慢よ、私！ 我慢してれば、すぐに到着するだろう。車がゆっくり動きだす。

「おい、簾穰寺。家に行くのは、コンビニによってからでもいいか？」

「私に拒否権はないんでしょう？」

そう言うと、藤宮先生は運転のため前を向いたままだったが、楽しそうに口角を上げて言う。

「可愛くない奴だな」

うつ！ 今の藤宮先生は半端なく色気があって、思わず見惚れてしまった。

コンビニに着いて、藤宮先生が買い物をしている間、私は車で待っていた。先生は、数分も経たずに戻ってくる。コンビニ袋の中に目がいく。中にはサキイカとビールが2本しか、入っていない。

ホストな見かけだから、シャンパンとか飲んでそうなのに。身体に悪そうな生活してそうな所は、そのままだが、予想以上に「親父くさい……」ボソツと声を出す。その声が聞こえたのか、藤宮先生は――

「大人なんだよ。お・と・な」

私だって、藤宮先生と同じ年だからわかる。これは、駄目な大人だ。

「藤宮先生、夕飯はそれですか？」

「別に腹が減ってねえから、いいんだよ。文句あるか？」

「それで身体を壊さないなら、いいんじゃないですか」

私が本当の女子高生だった頃なら、注意の1つや2つしていただろうが、大人になって自分も似たような生活をしていた。人様にどうこう言うことはできない。それに藤宮先生は、他人に干渉されて怒るような思春期は終わっただろうが、いい気はしないと思う。大人になれば、全て自己責任だ。

「藤宮先生のしたいようにすればいいと思います」

藤宮先生は私の家に着くまで、無言のまま運転をしていた。沈黙が支配した世界は、ひどく気まずく、息がしづらかった。家の近くに着くと、車を止めてくれた。先生にお礼を言っただけで別れた。

鳥居をくぐると、明かりの点いた家が見える。夜のボロ神社と木造の日本家屋は、昼と雰囲気の違い、不気味さが10倍はあがっている。そこに、ちょうど良く風が吹いて木の葉が、ザワザワいう音もしてくる。

人がいる？　お、お化けじゃないよね！？

逆光でよく分からないが、家の外で人が立っているのが見える。近づいてみると綾君が立っていたことが分かった。

夜は気温が下がって寒いというのに、私を待っていてくれたんだろっか？

「ただいま」

「お帰り、姉貴」

「外で待っていてくれたの？」

「別につ、姉貴を待ってたわけじゃねえ！……………あんまり、心配
させんなよ」

綾君は目をそらして、慌てていた。ツンデレな綾君のことだ、最初の言葉は、逆の意味で聞けばいい。これは絶対に待ってくれていた。でも、シスコンな綾君は夜遅くなったら、心配で学校に迎えに来ると思っていた。

期待していたのに……………そう思って気付く。私は何を、期待したんだろう？

13話 美人神主と私が巫女！？

意識が浮上してくるのが、ぼんやりわかる。カーテン越しに朝の光を受け、布団で寝返りをうつ。この、うとうとしている時が、一番幸せよね。今日は休日だから、私の安眠を邪魔する人は誰もいない。再び襲ってきた睡魔に身をゆだねる。それから数分経ったかもわからないうちに悪夢を見た。

く、くるしい。重い……悪霊にでも取り付かれたのかしら？

お腹に人が乗っているみたいだ。ギユウギユウとお腹が、締め付けられる痛みが強くなる。耐えられなくなった私は、目を開いて、がばっと上半身を起き上げ、状況を把握する。

「……ちょっと！ 痛い、痛いわ！ どいて下さい！ ノリトさん！」

目の前には、私の腰に、渾身の力で抱きついて——締め付けている神主服を着たノリトさんがいた。ノリトさんは顔も、私のお腹にうずめて、子供みたいだ。この力が強くなければ。

「ノリトさん！……内臓が……出ちゃう、出ちゃうわ！」

「トワちゃん、トワちゃん！」

私がぐったりした頃に、やっと解放してくれる。瀕死つてこうことなのね、と悟りを開いていると、ノリトさんが私の両手を持ち、顔を近づけてくる。いつもの笑顔がない、相当に焦っているみたいだ。

「トワちゃんにお願いがあるんですけど、いいですか？」

「わ、私にできることなら……」

あまりの迫力に頷く——なんで、頷いちゃったの！私のお馬鹿！

「これを着て欲しいんです！」

ノリトさんは、ゴソゴソと懷から巫女服を取り出す。無理やり持たされた服は、

生暖かった。

もう、そんな所から出さないで、全然、嬉しくないから！微妙すぎて、ぞわつとしちゃったわよ！

「何で巫女服なんて、着ないといけないんですか！？」

「そ、それが、参拝者が多すぎて、僕1人だけでは、どうにもならないんです！」

「はあ！？あのボロ神社に参拝者って、どうしてですか？ご利益をくれるどころか、逆にもってかれそうな勢いの神社じゃないですか！」

「僕にもよくわからなくて、朝の掃除に行ったときには、わらわらと、もう沢山いたんです！助けと下さい、トワさん……！」

そんなG様がたように言うのは、どうかと思うわ――

「む、無理ですから」

私が巫女服を着て行ったところで、どうにかなるとは思えない。むしろ、混乱させる自信がある。それに、そんなイベントに首を突っ込みたくないというのが本音だ。

「そうですか……どうしても無理だというなら……」

ノリトさんは、いきなり雰囲気が変わる。いつもの腹黒そうで、何かを企んでいる笑顔に変わる。私は、後ずさりしながら聞く。

「む、無理だというなら？」

「この体操着、ブルマセットを着てください！」

なんで、その2択なの！？ 絶対に嫌！ 絶対に着たくない！

「巫女服はわかるけど、なんの関係があって体操着なんて着る必要があるのよ！」

「僕が元気になります！」

その言葉を聞いた私は、ため息を吐いて脱力する。結局、神社を手伝うことになってしまった。

なれない巫女服を、時間をかけて着る。鏡で見た自分は、イギリス人の父親の血が流れている、この外人顔な美少女の姿と、巫女服は、違和感がありまくりだった。

コスプレにしかみえないわ。

準備が終わり、ノリトさんと家の外に出る。外は、境内を埋め尽くさんばかりの人がいた。とくに女の人達が多い。私と一緒に出たノリトさんを、アイドルのように目を輝かせて見ている。この人達はノリトさん目当てだ、ということは一発でわかった。

巻き込まれ損よね……

女の人達は、ノリトさんの隣に立つ私を睨みつけている。数少ない男の人達は、顔を赤くさせている。

あんまり見ていると、観覧料とるわよ！

そう言ってしまいたい。我慢、我慢よ！ ノリトさんは、私を引っ張っていく、人の山が綺麗に左右に分かれて道ができる。連れてこられた場所は、売店のような所だった。

「トワちゃんは、ここでお守り、絵馬、破魔矢、お札などを売ってください」

私が了解する前に、ノリトさんは小走りで、どこかに行った。それから、最初は勝手がわからず、おろおろと対応していたが、仕事をしていたときの勘を取り戻すと、難なく対応ができた。

お昼を過ぎる頃になると、人の数が落ち着いてくる。しかし、私に息つく暇はなく、売店は男性客が殺到していた。迷惑なことに私に熱狂的なファンができてしまったらしい。客が物を買うことに握手を求められる。

私は、どこのアイドルよ！？

頭が、プツンする直前に、ノリトさんが売店に入ってくる。話しかけたいが、男性客の相手をする。

「あ、あのお守りと絵馬下さい！」

「お守りと絵馬を合わせて880円です」

代金をもらった後に、握手を求められる。手を出そうとすると、ノリトさんが、私の隣に来て、休憩をするように言った。その後に、男性客と話し出す。

「お客さん、今なら破魔矢が、安いですよ。いかがですか？」

男性客は、美人なノリトさんが笑顔で、押し売りをしているのに気付かず、逆に顔を赤くして嬉しそうにしている。鼻の下も伸びきっている。

男性客さん、気付いていますか？ ノリトさんは男ですよ！？
知らないほうが、幸せってこともあるし……放っておこう。

「それじゃあ、矢を1本下さい！」

「ありがとうございます。破魔矢は、後日に送りますので、住所を教えてください」

「は、はい。郵送ですか？」

「いえ、直接、——あの世に——お届けいたします」

「へ？」

「なんでもありません。素早く確実に送りますから、心配しないで下さい」

さつき普通に、“あの世に”って言わなかった！？ 素早く確実に送るとか、怖すぎますよ、ノリトさん！？

ノリトさんは笑顔で男性客を丸め込んだ。その様子に不穏な空気を感じ取った他の客も、蜘蛛の子を散らすようにいなくなった。売店には、ノリトさんと私の2人だけが残る。突然、ノリトさんが話し出す。

「はあ、駄目ですよね……」

「な、何がですか？」

ノリトさんは意味深発言が多すぎて、どのことを言っているのかわからないわ！

「トワちゃんに僕以外の男性が、近づいているのを見るとイライラしてくるんです」

何と言葉を返していいのか分からずに黙る。気まづくなる雰囲気の中、ふっと頭に重みを感じた。ノリトさんが、私の頭を優しく撫でてくれている。

「トワちゃん、今日は本当にありがとうございました」

「あつ、別に大丈夫ですよ。困った時はお互い様ですから、いつで

も言って下さい」

どこまで社交辞令が得意な日本人なんだ、自分！ 言ってしまった言葉に後悔する。 ノリトさん、空気を読んで、正確に遠慮して！ と思うが、伝わらなかったようだ。 ノリトさんは、それじゃあ、あと1つだけと言って、言葉を続ける。

「トワちゃんにお願いがあるんですけど、いいですか？」

笑顔で朝と同じ言葉を繰り返すノリトさんに、デジャブというより、違和感を覚える。 笑顔が腹黒いわけではない、心が入っていないというか元気がない、空っぽな感じだった。

「私にできることならいいですけど…… なんですか？」

「ありがとうございます。 明日、赤岡というお寺で、お墓参りに行って欲しいんです」

「お墓参りなら、ノリトさんが行ったほうがいいんじゃないですか？」

「はい、本当なら、僕が行かなきゃ行けないんですけど、どうにもお寺の坊主に嫌われていて、行くとほうきを振り回されて、すぐに追い出されてしまうんです」

「へ？ 何で、ですか？」

首を傾げながら聞く。

「最近、ここの神社が人気なのが気に入らないらしくて…… 困った

ものです」

「そうなんですか。……すみません。このボ口神社に来てもらったばかりに、お墓参りに行けなくなるなんて」

「謝らないで下さい。僕がここに来ることを、選んだんです。今だって、後悔していません。可愛いトワちゃんの、傍にいられるのですからね」

うつ、さつきから口説き文句が多すぎですから！ 対応に困るからやめてよ！

「……それで、誰のお墓参りに行けば、いいんですか？」

「蒼井あおい 百合ゆり——僕の妹です」

一瞬、時が止まった。その女の人は知っている。ゲームでも名前が出てきた。故人でありながら、今後に大きな影響を与える特別な人。

「妹さんのお墓参りなら、ますますノリトさんが行ったほうがいいじゃないですか！」

行くといったら危険度の高い、ノリトさんルートが濃厚になってしまう。でも、断ったら別の死亡ルートがでてくるはずだ。

「明日も休日で、参拝客が多いと思いますから、神社からは離れられません。命日に、どうしても、花だけは供えたいんです。お願いします」

決め手は、ノリトさんの真剣な言葉だった。私は覚悟を決めて頷く。もう、どうにでもなれという気持ちだ。

どちらも危ないなら、進むしかないわ！

こうして、私はノリトさんの、妹さんの所へお墓参りに行くことになった。

14話 百合と私とお墓参り？

花束をノリトさんに渡される。その花は、清潔感に溢れた白い百合の花だった。

「妹と同じ名前の花です。あの子は、その花を一番、好んでいました」

「そうなんですか……綺麗ですね」

ノリトさんは昔を思い出しているのか、優しく微笑んでいる。その姿は、朝の光に溶けていきそうで儚く、百合のように綺麗だった。

私は、百合さんのことを何も知らないことになっている。だから、今の彼にかける言葉がない。もし、私が言葉をかけたとしても、何も変わらない気がする。こういうデリケートな問題は、この歳になっても、対応ができない。無言で百合の花を、見つめていると、ノリトさんは、いつもの笑顔に戻り、何を考えているのか、分からなかった。

近づいて来るわりに、自分の心には踏み込ませないって感じよね

「それではお願いしますね」

「……はい、任せて下さい」

バスを2回乗り換え、3時間半経った頃に、百合さんが眠っているお墓のあるお寺に着いた。お寺は、私の家にあるボ口神社よりは、

まだが寂びれていて静かだった。ふと、ノリトさんの言葉を思い出す。

——最近、ここの神社が人気なのが気に入らないらしくて……

お寺に人気を求める坊主とは、どんな人なのかしら？

ゲームでは、声優も絵すらもないモブキャラクターだった人よね。考え事をしていると、坊主らしき、お年寄りがいたので話しかける。

「すみません、お坊さんですよ。蒼井家のお墓ってどこにありますか？」

「なんじゃあ？ 別嬪のお嬢さんは、……あのボロ神社の色男の恋人かのう？」

まじまじと観察されるような視線にイラッとする。しかし、お墓の場所を聞くまでは、顔に出すわけにもいかない。

「……ただの知り合いです」

「どうだかのう、あの色男は人を惑わせる物の怪のような奴じゃ！ わしの寺の檀家さんが、何人消えたか。わしの寿命が50年は縮んだんじゃ！」

今、お迎えが来ても大往生じゃないですか！ おじいさん！ なにちゃっかり、自分の寿命延ばしているんですか！？

「あのハゲ！ 自分で探したほうが、絶対に早かったわ！」

愚痴に付き合うこと2時間後、やっと場所を教えてもらい早足で移動する。そこは、お寺の一番遠い所だった。お寺の中心には立派な墓が並んでいたが、離れることに質素なものが増えていく。目的の場所が見え、歩く速度を落とす。……人？ ブロンドの髪、スーツを着た男の人がしゃがんで手を合わせているのが見えた。

「……藤宮先生？」

その言葉が聞こえたのか、男の人は振り返って私を見て、一瞬だけ目を見開き驚いていたようだった。やはり、男の人は藤宮先生だった。

「簾穰寺か？ こんな所で何してんだよ」

何って、ここに来たらお墓参りしかないと思うんですけど……

「蒼井 百合さんのお墓参りに……」

「百合の？ 知り合いなのか？」

「ノリトさん……百合さんのお兄さんに頼まれたんです」

「っ、則斗さんが？ 今、あの人はどこにいるんだ!？」

藤宮先生に両肩を？まれ、強く揺さぶられる。手に持っていた花束が、がさがさと一緒に揺さぶられ、花弁が2〜3枚散った。

「ぐっ、藤宮先生！ 落ち着いて下さい!」

「あ……簾穰寺……悪いな、取り乱しちまって」

私の言葉に、我を取り戻した先生は、手を離して、バツが悪そうに顔を下に背けた。私は、花束を抱えなおし、百合さんが眠るお墓を見る。小さなお墓には、先生が先に備えた、白い百合の花があった。

私もノリトさんから預かった、花を供えて、手を合わせる。

「先生は、百合さんとお知り合いなんですか？」

藤宮先生は、じつと百合さんの眠るお墓を見た後に、煙草を取り出して火をつける。少し間があいて、話し出す。

「百合は……………俺の婚約者だった」

「……………そうなんですか」

空気が、重い。私は、どうしたらいいの？

「……………そういえば、藤宮先生はノリトさんの居場所を、知らないんですか？」

「則斗さんは、百合の葬式後に、連絡がつかなくなった……………住んでいた家も売り払って、ずっと行方がわからない」

「ノリトさんは私の家にいますよ」

「は？」

キョトンとして、私が何を言っているのか分からないという顔を

した藤宮先生。もう1度同じ言葉を繰り返すと、やっと理解してくれたように、そうか、と言って目を伏せた。

「……おい、連穰寺。もう日が暮れてきたから送る」

「へ？ 別に1人でも帰れますよ」

「黙ってついて来い」

藤宮先生に引つ張られ、赤いド派手なスポーツカーに乗せられる。先生は、私の家に着くまで始終無言で運転していた。家の近くまで来ると、車が止まり、先生が車の扉を開けてくれる。

「藤宮先生って、普段は乱暴なのに、変なところで紳士ですよ」

「そういうことは黙っているのが、いい女だぞ」

少しの間視線を交わし、2人で同時に笑った。藤宮先生は、今まで見たこともない顔で、子供のように素直に笑っていた。気まずい雰囲気がなくなる。

こういう切換えが早い所は、大人よね……

「それじゃあ、俺は行くから」

「藤宮先生は、ノリトさんに会わないんですか？」

「俺は、今はまだ、則斗さんには会えねえ。もう少し……心の整理がついたら来る。則斗さんはすぐにいなくなったりしないだろ？」

「多分、そうだと思いますけど」

その言葉を聞いた先生は頷いて、帰っていった。車を見送った私は、鳥居をくぐる。このボロい神社にも、もう慣れた。

そんなに時間は経ってないはずなのにね――？

ふと視線を感じた方向に目をやると、ノリトさんがほうきを持って立っていた。

「ノリトさん、ただいま」

ノリトさんは私の方へ無言で近づいてくる。

うわっ！ いきなり、抱きしめられた。ほうきが転がる音が響く。

「お帰りなさい、トワちゃん」

「の、ノリトさん？」

どうして？ わけが分からない。混乱して動けない私を、抱きしめる力が、強くなる。

「今日は妹の所へ行ってもらえて、助かりました。ありがとうございます」

それだけ言うと、ノリトさんは、ほうきを置いてきます、と言い、笑って離れる。

「っ！」

その顔を見て、鳥肌が立つ。恐怖で、逃げたい気持ちが強くなる。ノリトさんの笑顔は、目だけは笑っていないかった。

背を向けて歩くノリトさんの姿が見えなくなるまで、目が離せなかった。

ノリトさんはあんなに冷たい瞳で笑う人じゃなかったのに……

15話 蒼井 則斗視点：宝物に告ぐ？

14話の蒼井 則斗視点

彼女には妹に会って欲しかった。僕の大切な家族に――

落ち着いた色の服を来たトワちゃんは、実際の年齢より大人びて見えた。彼女はもともと大人びた雰囲気を持っていたが、今日は一段と大人のような。

彼女に白い百合の花束を托す。

「妹と同じ名前の花です。あの子は、その花を一番、好んでいました」

「そうなんですか……綺麗ですね」

生きていた頃の妹の笑う顔が浮かぶ、と自然に微笑でしまう。同時に、虚しい気持ちにもなる。

「それではお願いしますね」

「……はい、任せて下さい」

彼女を見送った後、神社の管理を行う。昨日よりは、人が多くないことに、ほっとした。

妹の命日になると思い出す、昔のことを――

よくある悲劇を見せられているように、僕の生活は、音を立てて崩れていった。

蒼井^{あおい} 百合^{ゆり}は、僕のたった1人の家族にして、最愛の妹だった。

両親は、僕が19歳の時に死んだ。2人して、車中で練炭を使って心中したらしい。その連絡を警察から聞いた時には、“やっぱり”としか感じなかった。もともと、僕や百合は、空気のように扱われていた。2人にしてみれば、生きてればいいくらいの認識だっただろう。

入学したばかりの大学をすぐに辞めて、沢山の仕事をかけ持ちして働いた。若かった僕は、たいした給料も稼げずに貧乏だったが、小さなアパートで百合と2人で幸せに暮らしていた。他のものは何もいらないかった。

間違いなく、百合は俺の宝物だった。

僕が26歳に、百合が21歳になったある日、百合は恋人を連れしてきた。軽薄そうな男は、藤宮 恭といった。初めは反対したが、百合の一生懸命さに、藤宮の真摯な態度と、交際を許した。

それから3年後の春に、百合は死んだ。交通事故だと聞いて、会社の上司に断り、病院へ急ぐ。慌てていたため、よく分からなかったが、電話では、藤宮が運転する車が崖から落ちて、助手席に乗っていた百合も重症だと言っていた。百合が心配で、不安を隠せない。

病院についてから受付で百合の病室を聞き、行ってみると、頭と左腕に包帯をした藤宮が椅子に座っているのが見える。藤宮は下を向いている。

「百合は？」

僕が藤宮へ詰寄ると、無言で首を振る。

百合が死んだ？……………

「嘘だろ……………どうしてっ！」

「……………」

「なんでお前だけが生きている！？」

「……………」

「妹を、百合を幸せにするって言ったじゃないか！！ お前が……………お前が、死ねば良かったんだ！」

「……………」

なんで、なんでお前は何も答えない！

藤宮は、何も答えなかった。病室に行き、顔にかけられた白い布をゆっくり捲る。その顔を見て絶望する。目の前が、真っ暗になつて何も見えなくなる。頭に浮かんでくるのは、今日の朝に会った最後に笑っていた姿だけ。

神なんていない——僕は、あの瞬間から神というものを信じなくなった。

病室から出てきてからも、藤宮は、何かを言う事も、涙を流す事

もなかった。藤宮を何度も殴る。病院の職員に止められるまで殴った。

認めない——お前が、妹を愛していたなんて。

落ち着いてからは、いろいろな手続きをしたり、百合の葬式をしたりで瞬くように過ぎていった。これ以上、あの男とは関わりを持ちたくなかった僕は、海外に出た。

目的もなく、放浪としていた。

偶然だった、トワちゃんの両親に、話しかけられたのは。日本人が珍しかったのだろう。家族の自慢など様々な話をしてくる。適当に相槌をうつていただけなのに、こういう話の流れか、僕に、神社の管理者になって欲しいという話もしていた。

興味がなかった。しかし、トワちゃんの両親が出したのを見て……

っ！？——

その写真を見て、目が離せなくなる。百合に似ている……そう思ったのは、一瞬だった。よく見ると、容姿も何もかも、百合とは違った。ただ、纏う雰囲気がかかった気がした。トワちゃんに興味を持った僕は、神社の管理者になることを承諾した。

日本に戻ってきて、すぐにトワちゃんに会ったが、写真と雰囲気は180度も違っていた。写真では、内気そうな印象だったのに、実際の彼女は生命力に溢れていて活発な子だった。

妹と完璧に似ていない……

正直言って、がっかりした。せつかく、日本にまで帰って来たのに、彼女にはとっては理不尽だろうが怒りを覚えた。だから、腹いせに、この子で遊ぼうと思った。

僕が近づくとは大抵の女は顔を赤くさせるのに、彼女は顔を蒼くさせる所も、僕を怖がっているだろうに、からかうとすぐに怒る所も面白かった。何もかも、他の子とは違う彼女に惹かれていった。

ただの興味が好き変わって、それから彼女を愛しいと思うのに時間がかからなかった。彼女で、遊ぼうとしていた自分を殴りたいくらい反省している。しかし、そのおかげで彼女を知ることができた。彼女の前では自然に笑える。

僕は、いつの間にか、新しい宝物を手に入れていた――

命日には、百合のお墓参りに行きたかった。でも、僕から妹を奪った男がいるかも知れない。それだけで、僕の足が動かなくなる。妹に会って欲しいと思ったのは嘘ではないが、怖くて、憎くて……彼女に頼んでしまった。

考え事をしながら仕事をしていると、すぐに夕暮れになってしまった。

「あの！……」

人もいなくなっただけだと思っていた境内に、1人だけ残っていた少女が話しかけてきた。

「なんですか？」

「とても素敵な神社ですね。私、ここに来ると落ち着くんです」

「ここは、どう見てもボロ神社にしかみえないけど……」

「ありがとうございます。それでは僕は、神社の掃除がありますから失礼します」

とりあえずお礼を言って、去ろうとすると――

「待って下さい！……鳥居のほうに、結構、木の葉が落ちていましたよ」

「はあ？　そうですか、行ってみます。伝えて下さってありがとうございます」

少女は付いて来ることはなかった。僕は、鳥居の近くに着くと、トワちゃんが見えたので、声をかけようとしたが、やめた。彼女と話している人間が見える。

何故、あの男がいるんだ？　彼女と一緒に……

僕が、見間違えるはずない、この魂に刻んだ憎しみと怨念が、藤宮を忘れたりしなかった。しかし、あの男を殺したいと思う程、憎んでいたというのに……僕の身体は動かなかった。目が行くのは、彼女が楽しそうに、あの男と話している姿。それだけなのに、名も知れぬ黒い感情に飲まれる。

あの男は、百合を失っても、まだ笑うことができるのか。

男は、再び、僕から大切なモノを奪おうとしているのか。

許せない

許セナイ

ユルセナイ

「ノリトさん、ただいま……………え？」

近づいてきた彼女を、腕の中に閉じ込める。

「お帰りなさい、トワさん」

「の、ノリトさん？」

腕の力を、強くすると彼女の身体が強張るのが分かる。

「今日は妹の所へ行ってもらえて、助かりました。ありがとうございます」

その後、ほうきを置いてくると言っ、彼女が怖がらないように笑顔を作った。彼女から離れ、掃除用具入れの倉庫へ、歩く。

「ふふふ……………」

何故か気分が高揚して、笑えてくる。何もかも、悲劇だったはずなのに。

「今度は、必ず守ってあげるからね……」

僕の宝物——
ボクノウツモノ

2人で一緒にいよう？

僕から君を奪う“男”は全て排除してあげるから

「ねえ？ それくらい許してくれるでしょう？」——

——僕から宝物を奪った神様
ユリ

この世界に、君と僕以外いない。

これから、君のための喜劇を——

？話 名もなき男？の日常！？（前書き）

本編のシリアス展開に耐えられなくなった作者の暴走作品です。
ただのストーリーカーの話です。不快だと思う人は注意して下さい。お
願いします。 本編と全く関係ないです。

？話 名もなき男？の日常！？

一目惚れです。簾穰寺「トゥルーマ」トワという女の子を見て、ビビっときてしまったんです！

道行く彼女を見た瞬間に、天使が舞い降りたのかと思った。その後は、授業に行くのもやめて、迷わず彼女の後ろから付いて行く。

もちろんこっそりと！

それからというもの、彼女の情報収集をしまくった。小学校時代から大人しい性格の子で、あだ名は、“大和撫子”というらしい。ふむふむ。

双眼鏡を使い、学校でお昼中のトワたんを見る。

おっほー！ よく見えるぞ！ 双眼鏡を作った奴、グツジョブっすよ！

トワたんは女の子なのに、胡坐をかいて、ご飯を食べている。

大和撫子……？ ぎゃ、ギャップ萌えっす！

っていうーかスカートがもう少しで、みえ——ブッー！！

鼻血が出て、前が見えなくなった。

無念じゃ……

トワたんが、歩く道はゴミを避け、小石を避ける毎日。

この道をトワたんが歩くとは。ハア、ハア。

トワたんの家は神社、回りは茂みで隠れる場所が多い。

ひっそりと木陰に隠れること、忍者の如し！

「ぎゃあああああー!!」

俺の悲鳴ではない。この声は、俺の同志もどきA」の声だ。あの鬼畜美人神主にやられたらしい。上手く隠れられない奴は、やられる。

全く阿呆な男だ！

トワたんが神主と話をしている。

「ノリトさん、さっき悲鳴が聞こえませんでした?」

「ふふふ、気のせいですよ」

気のせいじゃありません！ そいつは鬼畜ですよ、離れてえ！

そう思っていると、トワたんがいなくなった。

「さあて、変態のお方、出てきたほうが身のためですよ」

ギクッ!!

出てったほうがいいのか！？ おどおどしていると、ガサガサと音がする。見ると、同志もどきBが出っっていたらしい。

お前いたのかよ！

「ぐわあああ！」

あわわわわ！ 口から心臓が出てくるかと思った。

出なくて良かった！

壮絶な最後を迎えた同志もどきBに敬礼！

抜き足、差し足で逃げていると――

ぎゃはっ！

顔の横に弓が刺さっていたよ、はい。それを見てダッシュで逃げる。

ちっ、逃がしましたか……という美人神主の声が聞こえた気がする。

次の日も、ゴミ拾いと小石拾いに精をだす。

これが俺の、スニーカーの献身。

16話 命の危機？家がああ！？

「ふふふふん」

私は今、某ヒロインのように午前中から、シャワーを浴びている。ピチピチの若いお肌は洗いがいいわ。機嫌が良くなって鼻歌が出てしまった。もちろん覗きなんていない……はず。

身体を洗い終わり、脱衣所で服を着る……って、この服何！？

見ると、用意しておいたパジャマはなく、白い襦袢が置いてある。こんなもの置いた覚えはない。綾君は、こんなことしない。残るは

……

「ノリトさん！ どこですか！？ パジャマを返して下さい！」

とりあえず襦袢を着て、走ろうと身体を動かすと、ふらつとして目が霞んだ。どうやら、貧弱なこの身体はシャワーを浴びただけで、のぼせて立ちくらみをしたらしい。脱衣所の壁に手をつく。

カチツと鳴る音がした後、黒い物体がシュツと勢いよく、目の前に出てきた。

「はぎゃー！！」

見ると壁から槍が突き出している。

……なんで、槍が壁から飛び出してくるのよ！ 先端は鉄製の槍

は、とても鋭く、落ち着いてみてからも肝がヒヤツとした。

この家は、ただのボロ平屋じゃないの？　　というか、乙女ゲーム
枠越えて、ファンタジーに入ってるない！？

対策しようと思っても、綾君にこの家のこと聞いたら、本当の姉
じゃないって、ばれるから聞けないし……　もしかしたら、変な死亡
フラグが立っているのかもしれない。とりあえず、LOVE度を確
認しとかないと！

綾君の部屋の前に来て、綾君が居ませんようにと祈ってからノッ
クを試してみる。

「あ？　誰だよ」

くっ！　居たのか、KYな弟め……　どうしようかと、これからの
展開を考えていると、綾君が目に入る。出て来た綾君は、私を見て
時間が止まったように動きを止める。

「え？　綾君、どうしたの？」

「……エロ……」

ボソツと綾君が呟く。

「へ？　綾君、よく聞こえなかったよ。もう1回言って……　って、
おい！　戻って来てよ」

綾君は聞こえてない様子で、まだ動かないので、顔の前で手を振

ってみる。

「はっ！ ど、どうして、そんな格好してんだよ！」

「そんな格好って……あ、この襦袢のこと？ 似合う？」

「わ、悪くはねえけど、そのぺちゃんこな胸じゃ、話になんねえーな」

「なんですって！？」

「ぺちゃんこって言ったんだよ」

ぬぬぬ！ 禁句を言ってしまったわね！ 地味に傷つくのよ……仕返ししてやる。

「…………綾君…………ヨンクスの『DXモンブランパフェ・チョコレート』が、食べたい…………買って来てくれる？」

「はあ？ ヨンクスって家から、2時間もするとにあるコンビニだろ？ なんて俺が…………」

もう1度、じと目を加えて言う。

「…………DXモンブ…………」

「だあああ！ わかった、買ってくるから。大人しくしてろよ！」

甘いわね、綾君！

コンビニに行く綾君を見送ってから、隙あり！と部屋に侵入する。

ベッドの下から“あのノート”を取り出して見る。

藤宮 恭 殺殺殺殺

蒼井 則斗 殺殺殺殺殺殺殺

大谷 拓真 殺

何度見ても怖いわね……というか、ノリトさんのLOVE度が上がりすぎている！ ヤバイわ！

ここはもう、安パイ狙いで藤宮先生か、大谷先輩とくつつくしかないの？ いや、大谷先輩が、ちよつとゲームの時の性格と違ったから、危険な気がする。

この先どうなるんだっけ？

僅かに戻ってきた、あやふやな記憶を掻き集めて考える。

ノリトさんは本当の意味で食べられちゃうルートあるのは絶対よね。藤宮先生はなんだったかな？ 俺様な性格で世界征服的なことをやらかしていた気がする。大谷先輩は、監禁？……

自分の命は大切だけど、監禁されてまで、生かされるのも嫌だし。

自分が幸せだからって、他人が不幸になっても良いなんて思えない。

殺したくらい好きだとかとか、自分だけのものにしたいから監禁するとか、好きな人のために周りを犠牲にするなんて、このゲームの登場人物は本当に歪んでいる。

でも、現実の人間よりも、人間らしい気もする。今は、何故そう思うのかもわからないが、そのうち分かる時が来るかもしれない。

考えすぎて、気持ちが暗くなる……あれ？ Dear って攻略対象キャラクターは3人だけ？

「少な過ぎるわよね……」

まだ出てきてないキャラクターもいるはずだし、その人が比較的に、まともであることを祈るしかない。

「とりあえず、ノリトさん以外の人と関わってみようかな……」

気付くと、綾君へ買い物頼んで2時間が経とうとしている。鉢合わせないように、部屋を出て廊下を歩いていると、声が聞こえる。

「姉貴、帰ったぞ！」

「綾君、お帰りなさい」

綾君を出迎え、頼んだものをもらって、食べるために居間へ移動する。綾君は、部屋に戻って行った。

「美味しい！ 蕩けちゃうわ！ 頭を使った後は、これよね！」

のんびり、テレビを見ながら食べると、綾君が走って居間に来る。
だから、そんなに走ったらボロい床の板が抜けちゃうよ！

「おい！ 姉貴、俺の部屋に入っただか！？」

ドキッ！

ば、ば、ばれたあああ！ どうしよう……

本当のこと言ったら――

『綾君の部屋に入ってたわ』

『どうしてだ』

『……は、入ってみたかっただけよ』

『机の引き出しは見たのか？』

『し、し、知らんぜよ』

『……』

『ふ〜ん、姉貴は昔から嘘が下手だな……見たんだな』

ぐはっ！ これは、ばれてしまう確立高いわ！

「姉貴！ 入ったのか？」

走ってきた時より落ち着いた綾君は、私の目をまっすぐ見て、聞
いてくる。

「入ってないわ。綾君の部屋なんて、これっぽっちも興味ないもの」

「……………」

私の言葉を聞いた綾君は、シユンとして、見えない尻尾が垂れ下がった気がする。

やっちゃった！　気まずいわ！

誤魔かすように、綾君に話しかける。

「どうして、そんなこと聞いてきたの？」

「……………俺の部屋にこんな本が置いてあって……………」

綾君の手から本を受け取って見る。その本は――

エロ本やないか！？

はっ！　驚いて大阪弁になってしまったわ。　綾君の部屋を搜索した時は、1冊も見つけられなかったのに！

「……………これ、綾君のでしょ？」

「ばっ！　違えよ！」

綾君が、おろおろとして視線を彷徨わせる。

落つついて考えてみると……………姉が弟の部屋にエロ本を置くとか、絶対無い！　むしろ、疑うほうがおかしい。私がやってないなら、

こんなことするのは――

「ノリトさんが置いたんじゃない？」

「は？ ノリ兄がなんで？」

「知らないわよ。後で本人に聞きなさい」

疲れたああ！ パフェを食べるのを再開する。

「うう、やっぱり美味しい！」

「おい、姉貴。チョコが口の周りについてる」

「……？」

言われた場所を拭く。

「馬鹿、違えよ……ったく、しょうがねえな」

そう言っ、綾君は少し笑ってティッシュで……と口の周りを拭いてくれる。

うう、照れるわ。それを誤魔化すように話す。

「ありがとう……綾君も食べる？」

「はっ？ 何言っただよ！？」

「綾君が買ってきてくれたし、御礼だよ。ほら、あーん」

最初はうるたえていた綾君も、暫くして諦めたのか口を開く。ス
プーンを口に入れようと、手を動かすと――

ドッカーーン！！ という衝撃音と地震のような揺れが起こっ
た。

「何事！？」

驚いてスプーンを畳に落とし、慌てて右往左往とする私と、スプ
ーンをじっと見ているが、落ち着いている綾君。

そんなに、パフェが食べたかったの？ と思っていると、綾君が
話し出す。

「多分、“あれ”だな」

「あれって何よ？」

「子供の時にも何回かあったろ？」

その過去を知っているの、私じゃないですから、本^{マジ}気で知りませ
んから！

綾君の後ろについて、音のしたほうに行く。綾君は、誰も使つて
ない部屋に入って行った。その部屋は、畳だけあって、家具も何も
なかった部屋だったはずだ。

部屋の中に入って目に入っただのは……階段？

地下に続く階段が、その部屋にはあった。前に見た時には、絶対になかった、この危険スポットは。綾君は、迷わず地下に入っていく。私も、恐る恐る軋む木の階段を降りる。

地下は埃っぽいが、広い。下にいたのは――

「やっぱり、ノリ兄か！」

「どうしてこんな所に、ノリトさんがいるんですか？」

「トワちゃんに綾くんじゃないですか。いや、この家が面白いので探索していました」

ニコニコと楽しそうに言うノリトさん。

「いやいや！ 槍が出てきたり、変な地下が出てきたりする家のことか楽しいのよ！？」 毎日、命の危機じゃないの！

心の中で、つつこんでいると、綾くんが話します。

「この家は、俺たちの何代か知らねえが先祖が、建てたカラクリ屋敷なんだ。何とかっていう神仏の像を守るために、いろいろ細工してあるんだよ」

このボロ平屋が！？

「普通に生活していて、命の危機を感じるなんて嫌よ！ 建て替えないの？」

「姉貴、忘れたのか？ 建て替えようとして、下見に来た業者が数人、犠牲になつて逃げてつただろ？」

知らないわよ！

「僕は好きですけど」

聞いてないわ、ノリトさん！

「この家の事はいいとして。ノリ兄！ 俺の部屋に、この本を置いていったろ！？」

本を片手に、ノリトさんに詰め寄る綾君。

「ああ！ その本を置いたのは僕です。どうでしたか？」

「見てねえよ！ なんでこんな本を置いたんだよ！」

ノリトさんは、一瞬だけ目を私の方へ向けた。笑顔のままだったが、雰囲気は氷のように冷たく、部屋の温度が下がった気がする。

「僕は、そろそろ綾くんに“姉離れ”をしてほしいんです」

「はあ？ な、な、何を言ってるんだよ！」

綾君は、顔を赤くして、拳動不審になる。

「姉弟は、いつまでも一緒には居られないんですよ」

ノリトさんの言葉は、綾君に向けられているような、私に向けら

れているような、不思議で空虚な響きをもっていた。

綾君は赤かった顔を青くして、手をギュッと握り締める。少し間が開いた後に、ボソツと声をだした。

「……………わかってる」

ノリトさんにも、その声が聞こえたのか、笑顔を柔らかいものに変わる。

「理解してもらえて、良かったです」

それだけ言うと、ノリトさんは階段を上っていった。

私も、綾君にかける言葉が見つからず、部屋に戻った。

窓からは橙色の光が入ってくるのを見てだいぶ時間が経ったことに気付く。もやもやした気持ちを感じながら1日が終わった。

どうしてこの世界は、現実より息苦しいのかな？

17話 爽やかな部活と……え!?

今日も学校が終わり、帰り支度をしてると、隣の席に座る可憐ちゃんに声を掛けられる。

「トワさん、このあと空いてますか？」

「えっと、どうしたの？ 可憐ちゃん」

「実は……放課後には大谷先輩の部活をしている所を見学したくて、トワちゃんと一緒に行って欲しいのです」

あの爽やか美青年の先輩の所に……

迷ったが可愛い可憐ちゃんのお願いに、断ることはできずに首を自然に縦に振った。

「ありがとうございます。さっそく野球部のいるグラウンドに行きましょう」

ふわりと笑った可憐ちゃんに手を引かれて早足で歩く。学校の単調な廊下の角を2回曲がった所で可憐ちゃんの足が急に止まり、後ろにいた私も慌てて止まった。

「可憐ちゃん？」

声を掛けても反応がなく、可憐ちゃんの視線の先を追う。

そこには、2人の男子生徒がいた。1人は柄の悪そうな3年の先輩で、もう1人は眼鏡を掛けた小さな男子生徒。床には大量のプリ

ントが散らばっている。聞こえてきた話し声で、柄の悪い3年生が眼鏡の生徒に一方的に絡んでいるようだ。

「てめえ、ふざけんなよ！俺にぶつかっておいて、ただで済むと思うなよ！」

「す、す、すみません！僕の不注意で……」

「すまねえと思ってんなら土下座でもなんでもしろよ！このボケ眼鏡がっ！」

……こいつは、どこのヤクザか不良だ。呆れを通り越して、もはやどうでもよくなる。

「うう、ほ、本当にす、すみませ……」

眼鏡の生徒は今にも泣きそうにしながら謝り、土下座をしようとする。その姿を見ると流石に止めて上げるのが人情かと、2人の男子生徒の間に立つ。

「あら、何をなさっているのかしら？喧嘩でしたら先生をお呼びしましょうか？」

声を掛けると、柄の悪い3年はプリントを踏みつけ、すぐにいなくなつた。残る眼鏡君に、視線を向けるとおもいつき横に顔ごと目をそらされた。眼鏡で表情は見えずらいが、耳が真っ赤になっている。眼鏡君は、近くで見ると意外に背が高い。背中を丸めて、下を向いているせいで小さく見えていたようだ。

何故かフリーズした眼鏡君を不思議に思いながらも、可憐ちゃん

に協力してもらいプリントを全て拾った。そして、再び、眼鏡君に話しかける。

「大丈夫？」

眼鏡君はビクツとした後に、プリントをぎこちない手つきで受け取る。

「れ、れ、れ、簾穰寺さん!!」

「はい、何かしら？」

「す、す、すみませんでした!」

眼鏡君は、ダッシュでいなくなった。

何に対して謝っていたのだろうか？

考えていると、可憐ちゃんが隣にきて、可愛く首をかしげる。

「トワさん、どうしたのですか？」

「最近の若い子って難しいわね……」

「ふふ、トワさんだって十分若いのに変なの」

そういえば、若返っていたんだっけと他人事のように考える自分があることにぞっとする。

——早く元の世界に帰らなくてはいいけないわ

グラウンドに着くと野球部の練習が目に入る。しかし、肝心の大谷先輩の姿はなかった。

がっくりしている可憐ちゃんを慰め、帰ろうとグラウンドに背を向け帰ろうとすると、走ってくる背の高い爽やか美形男子学生の姿があった。

大谷先輩は、可憐ちゃんと私に気がつく、目の前で止まった。

「えっと、君たちはこの前の……とーちゃんと、かーちゃん？」

「先輩……何ですか！ そのネーミングセンスは！？ とーちゃんと、かーちゃんってなんか親みたいだから！」

「え？ トワちゃんとはとーちゃん、可憐ちゃんのかーちゃんのほうかわかりやすいだろ」

「それ以前の問題よ……」

爽やかに笑っているこの男を殴りたいと思った。大谷先輩の発言に時々、イラッとするのは私だけ？

大谷先輩は、同級生らしき野球部員に呼ばれる。

「おい、大谷！ 遅えよ！ 女口説いてんなよ！」

「そんなんじゃないの！」

「じゃあ何してたんだよ？」

「……さっきまで寝てた」

「しょうがねえ奴だな！ 速く来い！」

「了解！ 2人ともゆっくりしていけよ」

大谷先輩は、爽やかな笑顔と言葉を残してグラウンドに向かった。

……

……

……

見学をしてわかったこと、大谷先輩は部活をしているほうが、格好よかった。時間を忘れて部活が終わるまで野球を見入っていたら、空は暗くなっていた。大谷先輩が近づいて来る。

「2人ともまだいたのか？ もう暗いし送って行くぜ」

「あら、そう？ 私は大丈夫だから、可憐ちゃんを送って行ってくれる？」

なんとって可憐ちゃんは一度、変態に襲われかけたのだ。絶対に守って欲しい。

「とーちゃんだって危ないのは同じだろ。 2人とも絶対に送るから行くぞ」

可憐ちゃんの家のほうが近いから1番に寄った。その後、2人で無言のまま歩く。沈黙が気まずいので大谷先輩に話しかけてみる。

「部活している大谷先輩は格好よかったわ」

「そっか……俺に惚れた？」

「いいえ」

反射的に答えた。

「ははは、真顔で即答って、とーちゃんは厳しいな」

会話しながら歩いていると、ふっと大谷先輩の顔が曇る。

「……先輩？」

「とーちゃん……あのさ、なんか後ろからつけられてる」

「えっ！」

「しかも、複数で」

「ど、どうでしょう？」

集団でストーカーとか怖すぎ！ 私は心の中で絶賛パニック中になる。

「うーんと、ヤっちゃおうか？」

爽やかに不吉なことを言う大谷先輩は、これまた爽やかに笑った。

「大谷先輩！ ここは穩便に逃げましょう！ って聞いてないしい

「！」

大谷先輩は、もう複数の人間と向き合って喧嘩を始めている。相手は殴り合いというより一方的に大谷先輩が殴りまくっている。

「ははは、弱いくせに、俺に楯突くとか笑える」

「なんだと！ お前なんかではトワ様につり合わない、消えろ！」

「お前がな」

バキッ！——大きな鈍い音がして、知らない男が倒れる。

振り返った大谷先輩は先程と変わらない爽やかな笑顔だった。

「とーちゃん、俺強かったでしょ？」

怖い、怖い、怖い——平然と何もなかったかのように話す、大谷先輩にノリトさんに近いものを感じる。

「え……ええ、そうね」

「でも今日のことは内緒だよ、俺と君だけのね」

「で、でも……この倒れている人達が話すかもしれないわ」

「ははは、それこそ大丈夫。この屑達の言葉なんか誰も信用しないから」

「……」

「とーちゃん、何か困ったことがあったいつでも俺に相談しろよ」

「ど、うし……」

恐怖で口内が乾いて、言葉がうまく出せない。

「うーんと、何？」

「どうして……私に、優しくしてくれるの？」

「俺はね、弱い者の味方だから」

「私は、弱くなんか、ない！」

必死で言葉を紡ぐ。そんな私に、大谷先輩は近づいて来て、目を合わせ凝視している。

「君は弱いよ。知らないのかな？ 君はいつも、誰よりも怯えた目で世界を見ている」

にっこりと大谷先輩は優しく微笑む。

「俺と一緒にだ」

意味がわからなかった。こんなに喧嘩が強い人と身を守る術がない私、どこが同じなのだろう？

比較的にもたもたと思っていた大谷先輩は、全くまともではなかった。

本当に狂っているこの世界――

18話 先生！何しに来たの！？

あの後、無事に家に帰ることができた。最後に不思議な言葉を残して……

「なあ、とーちゃん」

「何ですか？ 大谷先輩？」

「俺はお前のさ、目の前にいるか？」

いつもの爽やかな笑顔がなく真顔で質問してくる大谷先輩に戸惑うし、言葉の意味もわからない。実は幽霊でしたとか言われても困るし、家の——神社の前で、その話は笑えない。

「どういうこと？」

「……やっぱり、いいや。なんでもない。それにして腹減ったな！」

話を逸らして、大谷先輩は、何事もなかったように普通に帰った。本当によくわからない人だな……

翌日、今日は休日！ 神社の手伝いをするため、朝の5時に起きて、巫女服を着て掃除をしている。拭き掃除のため、外にある水道で、バケツに水を入れて運ぶ。

「よっこいしょ！ うゝ、重たい。寒い」

この非力で白い細腕は、今にも折れそうだ。見かけは高校1年生でも肉体年齢29歳とかいう設定は嫌よ。ふらふらしながら運んでいると、綾君が近づいてきた。

「おい！」

「綾君、おはよう。どうしたの？」

「貸せ」

「へ？」

私に手を差し出して何かを要求しているが、意味がわからない。

綾君に何か貸せるものがあつただろうか考える。

「バケツ貸せって言うてんだろ！ 目の前でふらふら歩いてんなよ。目障りだ！」

私の手からバケツを奪い、軽々と片手で運ぶ綾君。見かけは、私とそうかわらない、細腕美少年のくせに！ それに、毎度、口が悪いツンデレのシスコンめ！ 手伝うなら普通に言えばいいのに。

イラッとしたが我慢して、先に歩き出した綾君の後を追う。

「綾君、ありがとうね」

「っ！ 別にお前のためじゃないからな！」

綾君は、こんなに朝早くに起きる用事もないのに、ここにいると

いうことは、絶対に姉^{わたし}のためだ。後姿だから、わからないが綾君は顔を真っ赤にさせているはずだ。

ツンデレ美少年の赤面とか貴重！ 絶対見るべし！

回り込んで顔を見ようと早足になって頑張ったが、綾君の赤面は見られなかった。その前に、綾君は真顔で何かを見ている。その方向には人がいた。

「参拝者かな？ あの人……」

見たことのある人物だった。私の通う学校の数学のホスト教師だ。

「藤宮先生？ どうしたんですか？」

声をかけると藤宮先生はぎくりと身体を揺らした。どうやら私達に気がついて、いなかったみたい。

「お、簾穰寺か！ ちょっとな——」

少しほっとした表情と困惑したような表情が混ざって、複雑そうな顔をしている。いつもと違い、歯切れの悪い、もの言いに不思議に思っていると綾君が、藤宮先生と私の間に立つ。

「……姉貴、こいつ誰だ？」

「学校の数学教師で藤宮先生だよ」

「ふーん、先公かよ。こんな所になんの用だ」

藤宮先生を睨みつけて、敵対心いっぱい、毛をさかなでた猫のようだ。

「綾君、口が悪いよ。すみません、藤宮先生」

「いや、別に気にしてねえよ。始めまして“弟君”」

藤宮先生は、高い身長を利用して、綾君を上から見下し——
見下ろしている。

「いやいや、藤宮先生、子供相手にむきにならないですよ……」

睨み合う両者に弱冠、呆れつつ話を進める。

「ふ、藤宮先生、本当にどうしたんですか？ 神社に御参りでもないでしょう？」

「まあな…… 則斗さんに会いに来た」

「ノリトさんに？」

「俺なりの、はじめをつけに来た」

そう言った藤宮先生は、覚悟を決めたような表情をしていた。ノリトさんを探し、藤宮先生の所に連れてくる。ノリトさんは一瞬だけ驚いた顔をした後に、いつもの笑顔に戻る。

「則斗さん、今日は話があって来ました」

「そうですね…… 残念ですが、僕は話をする気はありません。帰っ

てください」

取り付く暇もなく、ノリトさんは踵を返していなくなった。藤宮先生は、追いかけることもなく、それ以上は何も言わず、去っていった。

藤宮先生は大丈夫かしら？ ノリトさんも様子がおかしかったし

……

私はどっちにいったらいいの？ もしくは、どっちにも行かなくてもいいのかもしれない。ゲームのように選択肢を悠長に選んでる暇はない。

本当に年齢とともにおせっかいさが大きくなったのか気がするわ

「私、ちょっと先生を見てくる！」

「姉貴！？」

綾君を残し、肩を落として落ち込む藤宮先生の後を追う。なぜ先生の所に来たかは自分でもわからないが、後悔だけはたくない。追いつくと藤宮先生は止めてある赤い車の前で、煙草を吸っていた。

「藤宮先生、大丈夫ですか？」

「……予想はしていたが、実際に拒絶されると堪えられないな。時間じゃ、解決できねえこともあるんだな」

藤宮先生の表情は暗い。落ち込んでるところ悪いが聞きたいこと

がある。

「でも、何を話しに来たんですか？　今更じゃない」

「そうだな……本当の話をしに来た」

「本当の話？」

「あの時は、話せなかった。話す勇気がなかった————そういえば、お前、則斗さんと親しいのか？」

「普通の家主の子供と居候の関係よ」

いきなり違う話を振られ、どうでもいいノリトさんのいたずらを思い出してしまい、むきになって刺々しい言い方になってしまった。

「そうか、親しいんだな」

藤宮先生は苦笑しながら、煙草を道路に捨て踏みつける。

ちよっと！　どこをどう取ると親しいという結論になるのよ！？

弁明をしようと口を開くが、藤宮先生が先に話し出す。

「これからドライブに行く」

「へあ？　お氣をつけて？」

「お前も行くんだよ。乗れ！」

「うお！」

誘拐同然に車の助手席に押し込まれて、女の子らしからぬ声が出てしまったがしょうがない。せめてもう少し女の子らしくと思い、おしとやかに足を斜めにして座る。藤宮先生はまったく気にしていないようだが……

藤宮先生は、車を無言で走らせている。適当に走っているのではなく、どこか目的地があるようだった。

「藤宮先生、どこまで行くんですか？」

1時間程たつところで、我慢できずに質問する。車は山を登り、どんどん人通りがなく、他の車も見えなくなっていた。藤宮先生はバックミラーを落ち着きなく、何度も確認している。

「……事故現場だ」

「百合さんの？」

「ああ、楽しくはないが、昔話を聞くか？」

「……」

——これはきつと大切な選択ね

物語を左右する重大な選択肢。生き残れるかどうかの選択の1つ。

私は……頷いて答える。

「聞かせてください」

藤宮先生は、前を見て運転しながら、ぽつぽつと話し出した。

「あの日は、天気が悪くて、雨が降っていた。百合が前日、急にドライブに行きたいと言い出して……俺も用事がなかったから、車を出した」

過去：藤宮恭視点

大学の講義が終わり、友人に軽く挨拶してバイトに向かう。先月から始めた新しいバイトは家庭教師。高校生の教科は簡単で給料はいいし、教師を目指す俺にはうってつけのバイトだ。1つ問題を挙げるとすると、教え子が女子高生だということ。デリケートなお年頃、少し間違えればセクハラと言われる。

こっちは全くそんな考えはないんだがな……

今日は、数学のいくつかの公式を覚えるまで書かせ、その後は応用を正解になるまでやらせた。

「恭先生もう無理！ 覚えられないから！」

「文句を言う暇があつたら公式を唱え続ける！」

「唱えるとか魔法！？ 数学って人智を超えているの！？」

「 $\int \{ f(x) + g(x) \} dx = \int f(x) dx + \int g(x) dx$, $\int a \cdot f(x) dx = a \int f(x) dx$ ……」

「きゃー、やめてえ！」

「今言った公式を100回紙に書きながら唱えろ。来週までの宿題だぞ」

「鬼！ 悪魔！ ドS！」

「……さっきの宿題について訂正する。1000回書きながら唱える」

教え終わると、母親がお茶とケーキを持ってきて話しだす。

「藤宮先生、うちの愛ちゃんは頑張ってお勉強していますか？」

「ええ。お母さん、愛さんは優秀ですよ。これなら、すぐにテストの点数も上がりますよ」

この家でのびのびし過ぎている教え子にプレッシャーをかける。

「ちよつ、恭先生何言って「まあ！ 本当に？ 愛ちゃんすごいわね」……」

適当に話を終わらせ、玄関で靴を履いていると母親に話しかけられる。

「藤宮先生、相談があるのですけど」

普段おっとりした笑顔を浮かべている母親とは思えない沈んだ表情をしている。重要な相談であると判断して、向きなおり真剣な表情をつくる。

「何か？」

「実は……愛ちゃんが最近、ストーカーされているらしくって」

「ちょっとママやめてよ！ あれは気のせいかもしれないし」

自信なさ気に、言葉が尻すぼみになっていく。

「どういうことだ？」

「えっと、最近、気がつくとか誰か知らない人に見られてて……でも、でも気のせいだと思うの！ だってあの人、女の人だったし！」

女が女のストーカー？ 変に思いながらも、家の戸締りをきちん
と行うことと、歩くときには人通りが多い場所を選ぶなど、いくつ
かアドバイスをして帰った。

夜中2時過ぎにレポートが書き終わり、寝支度をしていると電話
が鳴る。こんな時間に何のようだと言画面をみると恋人の名前が表示
されているのを見て急いで出る。

「もしもし、どうしたこんな時間になんかあったのか？」

「あつ！ 恭くん、やっと出てくれた。心配したんだよ！ 何回か
けても連絡取れないし」

心配？ 俺は百合に何か心配されるようなことをしたか考えたが、
何も浮かばない。

「それで何か用事でもあったのか？」

「酷い！ それが心配して電話した恋人に対する言葉！？」

何度か謝って、許してもらえた。今日の百合はどうもおかしい。何かに焦っているような、今にも泣き出しそうな不安定さがある。

「恭くん、明日って言っても今日なんだけどデートしたいな！ ドライブにしましょう？ 16時に恭くんの家に行くから、行き先は私に任せて！ じゃあ遅くに電話してごめんなさい。お休みなさい！」

百合は言いたい事だけ言つとすぐに電話を切ってしまった。今日は用事もないし、百合に会えば、何がおかしいのかもわかるかと眠りにつく。

目が覚めると、時計が12時を指していた。随分、寝たなと思いながら服を着て食事をする。いつも通りにいたら動いていると、16時になり百合が家に来た。白いワンピースは、曇り空のせいか澱んで見える。

「恭くん、ごめんね。無理やり約束しちゃって……」

「俺も暇だったし、気にするな。お兄さんにはちゃんと言ってきたのか？」

俺は、百合の兄——則斗さんに嫌われている。というか、認められていない。父親代わりでもある則斗さんは百合のことが心配なのだろう。

「うん。デートだって、自慢してきちゃった」

則斗さんの不機嫌な顔を思い浮かべて、少し落ち込みながら百合を自慢の真っ赤なスポーツカーに乗せる。

「それで、どこに行きたいんだ？」

「きれいな夜空が見えるところがあつて、そこに行きたいの」

「今、曇ってるぞ。雨が降りそうじゃないか？」

天気予報は見えていないが、どう見ても晴れそうにない。

「大丈夫。これからきつと晴れるわ」

百合は笑顔で自信がある様子だった。そうなのかと、深く考えずに百合の誘導で車を走らせた。2時間程、走ると大粒の雨が降り出した。山を登り続けて、道路の左、ガードレールの奥は断崖絶壁と言わんばかりに高所まで来た。

「百合、今日は帰らないか？ 晴れそうもないぞ？」

「大丈夫よ。それより恭くん、家庭教師をしているのよね？」

「ああ、まあな。給料はいいな」

「……あの子、可愛いわよね。私より若いし、明るくて友達も多いし、あの子が好きなの？」

「おい、百合？ どうしたんだ？ あの子は、ただの教え子だろ」

突然、泣き出した百合に混乱しつつも車を止めようと減速してウ

インカーを出す。

「ひっく、うん。車、止めないで、もう少しで着くから……もう少しで」

「百合、本当に昨日から変だぞ」

「ご、めんなさい。お父さんとお母さんの命日が近くなると、自分が抑えられないの」

百合の両親が心中したことは知っていた。なんとも言えない気持ちになる。百合は、ポロポロと涙を流す。雨脚もどんどん強くなつて視界を奪う。

「恭くんが女と話しているのを見るの嫌なの。離れていても他の女としないか心配なの。恭くんが好き、好き、好き」

「百合?……」

「ねえ? 恭くん。好きだよ。好きだから……一緒に死んで?」

お父さんとお母さんみたいに——笑顔で、そう言いながら百合は助手席から手を伸ばし、おもいきりハンドルを左にきる。ブレーキを踏んだが間に合わず、車はガードレールを突き破って、崖を転がり落ちていった。

20話 先生！先生！！（前書き）

俄然。ドロドロ……

回想終わり現在：主人公視点に戻ります。

20話 先生！先生！！

藤宮先生に過去の話を聞いた。

「病院のベッドで目が覚めて、百合はもういないって……」

「警察には話したんですか？」

昔を思い出して疲れた表情をした藤宮先生は、少し老けて見えた。

「言わなかった。いや、言えなかった。何を言っても、車は全焼して証拠はない。それに、俺自身が信じたくなかった。百合が死んだこととか、俺と心中しようとしたこととか、頭がいつぱいで……」

坂の途中で、車が止まった。道路に他の車は通らないので車が止まっても問題なかった。

「俺のハンドルミスで警察は片付けた。当日は、大雨で視界が悪く、俺は操作を誤った。事故で頭を強く打ったせいで記憶が曖昧になっているってな」

藤宮先生は車から降りて後部座席から、百合の花束を出してガードレールの側に置く。私も、車から降りて花を手向けたところに手を合わせた。

「ここにも毎年、花を供えに来る」

「あの今更なんですけど、どうして私を連れてきたんですか？」

「今にわかるさ。でも前もって言うなら、俺はお前に謝んなきゃな」
意味がわからず、首をかしげる。

「餌にしちまって悪かった」

それだけ言うと、藤宮先生は今来た道を睨む様に、目を細めて見
ていた。

数分もしないうちに黒い普通車が走ってくる。運転席に乗ってい
るのは、宮司の服を着たノリトさんだった。

「ノリトさん……」

車から急いで降りてきたノリトさんは、私の体を触って怪我がな
いのか確かめる。

「トワちゃん、無事ですか！？ 良かった」

「私は大丈夫ですから！ 藤宮先生の話聞いてください」

ノリトさんは嫌そうに顔を歪めて藤宮先生を視界にいれる。

「何を聞かされたかは知りませんが、トワちゃんはあの男に騙され
ているんです！」

「則斗さん！ お願いです、話を聞いてください！」

藤宮先生が必死にお願いしても、ノリトさんは頭を縦に振らない

所がおかしなことを言い始める。

「トワちゃんも、この男が好きなんですか？」

どこことなく焦点の合わない目をしたノリトさんは、急に笑顔を取り戻す。

「しょうがないですね……あなたが百合を崖から落とした、事実はそのだけです」

ノリトさんは穏やかな顔で崖の下を見つめながら、藤宮先生に近づく。やっと話を聞いてくれそうな雰囲気になったノリトさんに、藤宮先生は肩の力を抜く。

ドスッ！—— 一瞬の出来事だった。

ノリトさんは藤宮先生の背後に回りこみ手刀をきめる。油断していた藤宮先生は、目を見開いた後、ぐったりと意識を失った。

驚いて藤宮先生の所に駆け寄ろうとするが、ノリトさんに手首を？まれ傍に行くことはできなかった。

「藤宮先生！！ ノリトさん、離して！」

「トワちゃん……君が、悪いんですよ」

ノリトさんは、乗ってきた黒い車の後部座席に私を押し込む。そして、どこから取り出したロープで私の両手を縛る。おまけに、前の座席、伸び縮みする首の金属部分に丁寧に固定されて動けなくされた。

「少し待っていて下さいね。すぐ終わりますから」

「ノリトさん、何をする気？」

ノリトさんは、私の額にキスをして母親が子供に向けるような優しい笑顔で頭を撫でる。

「いい子ですから、大人しくしてして下さい」

ノリトさんは黒皮の手袋をはめると、藤宮先生に近づく。後部座席の窓から見えているしか出来ない自分にイラっとする。

ノリトさんは、藤宮先生の靴を両方脱がせて、丁寧にガードレールの側に揃える。

まさか——まさか、嫌な予感がする。当たらないで欲しい。

藤宮先生の身体を楽々と担ぎ上げたノリトさんは、迷いなくガードレールの方へ歩き——迷いなく藤宮先生を崖に落とした。

「藤宮先生！！ いやあああああ！」

ゆっくり落ちていく藤宮先生を、私は壊れたように叫ぶことしか出来なかった。

21話 ここは？

落ちていく藤宮先生に、開かない車のドアを必死に叩く。

藤宮先生！——ビックと身体が痙攣して、目が覚める。

夢？ ここは……？

布団らしき物の上で横になって寝ていたらしく、ぼんやりと周りを見渡す。薄暗い部屋は湿気が強く、かびの臭いに眉を潜める。身体を本格的に動かそうとするが、全く動かない。

え！ これが噂に聞く金縛り？！ 幽霊が出ないでよ！

ギュツと目をつぶる。少しすると、何かが近づいてくる気配がある。

「目が覚めました？」

知っている声がして、目を開ける。目の前には、火の点いたランプを手に持ったノリトさんが私を見下ろしていた。ランプの眩しさに目を細めて、慣れるまでの時間もなくノリトさんが話し出す。

「あの後、トワちゃんは車の中で眠ってしまったんですよ。覚えていますか？」

あの後……ノリトさんが、藤宮先生を崖に落としたのは夢じゃなかったのね。

「ううううう？（先生はどうなったの？）——！？」

声が出ない！？

間抜けな自分の声に驚いて、ノリトさんを見るとニコニコと楽しそうに話します。

「トワちゃんが眠っている間に、口にガムテープを貼って、身体をロープで縛っておきました」

「うううう！ うううう！ うう！（ふざけないで！ 今すぐ外しなさいよ！）」

「少し可哀想だなとは思ったんですよ。だから、テープは粘着性が強いものを選びました。ロープは動けない程度にしか縛っていませんし！」

いやいや、駄目でしょうそれ！

ノリトさんは、他にも何か話をしたあと、木で出来た梯子を上って部屋からいなくなった。

ランプは置いていってくれたので部屋は明るい。明かりがあるだけで少し安心できる。落ち着いて脱出方法を考えた。

考えた結果——脱出無理！

ロープでぐるぐるに縛られていては梯子も上れないし、声も出せないので助けも呼べない。早々に考えるのをやめて、木造の狭い部屋を見回したが、何もすることがなく飽きる。

藤宮先生は、死んじやったわよね。あの高さだし……私も死んだら、もとの世界に帰れたりしないかな……ん？ あの木目は人の顔みえるわ。あっちは、お魚に見える。

木目を見るのが楽しくなってきた天井を見終わると、ごろごろ寝返りをうって壁を観察する。

壁の低い位置に傷があることに気づく。よくみると誰かが書いた落書きのようで相合傘に汚い字で名前が書いてあった。

『あや / とわ』

これは……子供の時に書いたのかな？ それじゃあ、ここは——ガタッ！

天井で大きな音がして、ノリトさんが戻ってきたのかもしれないと、耳を澄ませる。

「ノリ兄！ 姉貴がいなくなって！ 姉貴の先公が事故で！」

綾君の声！

「落ち着いて下さい、綾くん。どういうことですか？」

「今朝、姉貴は先公を追っていったまま帰って来ねえんだ。それで、

探していたら話が聞こえてきて姉貴の先公が車で崖から落ちて意識不明の重体だつて！　姉貴も一緒に車に乗ってたかも！」

噂では藤宮先生は車で事故ったことになっているのか……でも、生きているんだ良かった。

少しだけ肩の力が抜けたところで、気づく。2人の声がこんなによく聞こえるなら、私のうめき声でも届くはず。

「そうですか…生きて……」

「うううう！　うう！！（助けて！　綾君！！）」

精一杯声を出して助けを求める。

「ノリ兄？　何か聞こえねえ？」

「床下にハクビシンでもいるのでしょうか。それより、今はトワちゃんを探す方が先です。僕はあの男が運ばれた病院を探して、一緒に彼女が居ないか調べます。綾くんは彼女が居そうな場所を、もう一度探して下さい」

「わかった」

ドタドタと綾君の足音が遠ざかっていった。逆に近づいてくる足音がする。梯子を降りながらノリトさんが話し出す。

「トワちゃん、聞こえましたか？　あの男はまだ生きているみたいです。あの男は下等な虫のように君の周りを目障りにうるちよろして……」

ノリトさんとの距離を取るため、部屋の隅にズリズリと下がる。

「トワちゃん、何でこっちへ来ないんですか？」

「うううう！ ううう！（近寄らないで！ 危険人物！）」

ノリトさんは、私の言葉がわかったのか梯子の側に立ったまま近づく気配もない。

「はあ、僕は君のことをとても大切に扱っているのに……あの男が
生きているせいですね。どこまで邪魔な男」

「トワちゃんは僕が守ります。ここには、僕の部屋の下にある地下室
ですから、誰も来ませんから心配しなくてもいいですよ」

君は僕だけ見ていればいい——そう言っ、ノリトさんは梯子
を上って行った。

きつと、藤宮先生の息の根を止めに行ったのだろう。今度こそ、
確実に……心配はできても、どうすることもできない。

音のない部屋で眠りに誘われるのに時間はかからなかった。ぼん
やりと壁の落書きを見てから、瞼を閉じた。

22話 視点：藤宮 目覚め…

視点：藤宮 恭

—— 恭くん。もう無理しなくてもいいんだよ。

百合？

—— 恭くん。目を開けなくてもいいんだよ。現実はずらいだよ？

百合はもう……これは夢か……

—— 恭くん。ここにずっと一緒にいよう？

百合……すまない。俺は、俺は生きていたんだ。

—— 恭くん。ゆ……ない。…ゆ…さない。

百合？

—— 許さない！

はっと目が覚めると見知らぬ天井が目に入る。ボーっと見ていると、段々記憶が鮮明になっていく。

「簾穰寺！ぐっ！？」

勢いよく起き上がると全身に激痛が走る。

こりゃあ肋骨が何本かいつてんな……くそっ、簾穰寺は無事なのか？

激痛が落ち着くのを待ち、必死に体を動かす。痛みから汗がじわっと出て白いシートにシミを作る。ベッドから降りようと足に力を込めるがたえられず鈍い音とともに床に倒れこむ。

「つつっ！！」

「ははは、何か面白そうなことしてんな。虫の息って感じ、藤宮センセイ？」

「誰だっ！？」

まったく気配のなかった部屋に、背後からいきなり声がして驚き振り返る。

「そんなに怯えないでよ。敵じゃあないからさ」

「お前は……」

目の前にいたのは俺が教えている学校の制服を着た2年の大谷拓真だった。大谷はこんな状況だというのに、いつもと変わりなく笑っている。

「どうして大谷がここにいる？」

「それよりさ、もうすぐここにノリト？とかいう奴がくるぜ」

「っ 則斗さんが！？」

「そうそう、めっちゃ目すわってるからウケちゃった。早く逃げたら？ あと、病院の裏にある中野公園に行ってみればいいと思うぜ」

この部屋にいたことや、則斗さんがもうすぐ来ることを知っていることなど、大谷は不可解なことが多すぎて動く気にはなれなかった。大谷は呆れたようにわざと大きなため息をついてみせた。

「大人って頭固くてメンドイな。とーちゃん——じゃなくってトワちゃんがあんたのせいで行方不明になってんだから、早く助けてよ。彼女弱いんだから」

「簾穰寺が！？」

俺1人なら殺されてもしょうがないが、簾穰寺を餌にしちまった責任はとらねーと！

裏の公園を目指すため足を引きずりながら、病室を出る。大谷はついて来ることはなかったが、最後にみた表情は哀愁たonyうような微妙な笑顔だった。ナースステーションの前を過ぎようとした時

——見知った顔を見て柱に隠れる。

「すみません。藤宮恭のお見舞いに来たのですが何号室ですか？」

看護師に話しかけていたのは則斗さんだった。

「ご家族の方ですか？ 藤宮さんは5日たっても意識が戻ってないんです。会っても話はできませんよ？」

俺は5日も寝ていたのか！

その事実には驚きつつ、隠れている間にも痛みがじんじんと身体に響き冷や汗がたれる。則斗さんは俺に気づかず、通り過ぎ俺は中野公園を目指した。

公園につくと眩暈がして近くのベンチに倒れこむように座った。意識が朦朧としながらも、血が服に滲んできたことに気づく。

ここに何があるってんだ？ 大谷にかつがれたのか？

「おいっ姉貴の先公！ 姉貴をどこにやったんだよ！？」

呼びかけられ、目を向けると簾穰寺の弟が走ってきた。

大谷は簾穰寺の弟が来ることを知っていたのか？

「居場所は知らないが、誰といるかは知っている。とりあえず、場所を変えるぞ」

周りを注意深く見渡しながら移動する。だいぶ公園から離れたところで、弟が焦れたように話だす。

「それで姉貴は誰といるんだよ！」

「簾穰寺は則斗さんと一緒にいるはずだ」

「はあ？ ノリ兄と？ そんなはずねえって、ノリ兄は俺と一緒に

姉貴探してくれてんだぞ！」

頭に血が上った弟が、俺の胸倉を掴みに睨んでくる。普段の俺なら軽くないなしていたが、怪我のせいで体がどうにも鈍い。

まったく、若いな……その血を分ける。

「くっ！」

格好悪く、呻くと弟がぱつと手を離す。何かをじっと見ているかと思えば、俺の服のシミに気がついたようだった。

「あんた血が……」

弟は頭から血が下がり、話ができるようになった。

「則斗さんは、最近おかしい行動はしてないか？」

むすっとした様子だが、弟は少し考えてから話す。

「……一緒に姉貴探してくれたりしてくれたけど、それ以外は家に……部屋にこもりつきりだよ」

「部屋に簾穰寺が監禁されているという可能性は？」

「まさか！俺はノリ兄の部屋にも行っただけど誰も……」

話の途中で何かに気づいたように言いよどむ弟を問い詰める。

「……ノリ兄の部屋には誰もいなかったけど、地下なら……」

則斗さんの執着ぶりから考えて、遠くに監禁したりはしないはずだ。

「簾穰寺はきつとそこにいる。早く助けに行くぞ！」

「お、おう！」

弟と足を引きずった俺は急いで簾穰寺の家へ向かった。

簾穰寺っ、無事でいろよ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6072q/>

Dear 狂愛

2011年9月25日11時15分発行